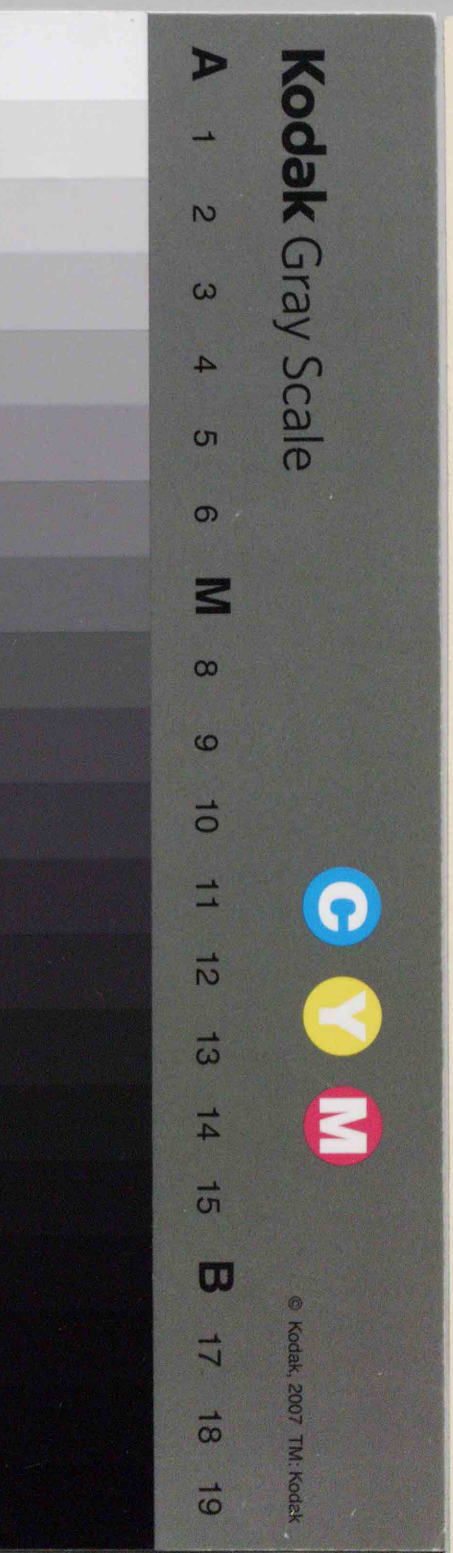
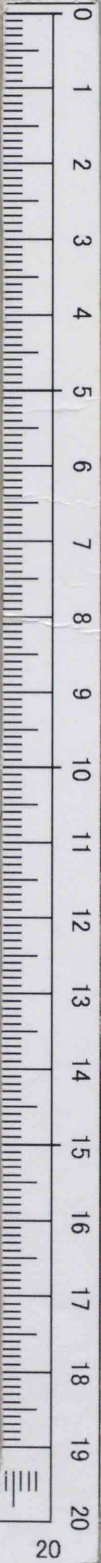


3759
Dc8
資料室

新定
中等國語讀本
落合直文編
森林太郎補
卷一



41481
教科書文庫

4
810
41-1921
200030 1685





山陽中學校
第一學年B組
山本春三

新中等國語讀本卷一目次

一、	青年の覺悟	一
二、	國引	四
三、	我が國花	八
四、	水車(新體詩)	一二
五、	春の旅	一四
六、	田舎より(書簡文)	二一
七、	烈風中の飛行	二四
八、	蒔かぬ種は生えぬ	三〇
九、	湖山長者	三七

目次

一〇、 狂夫の言	四三
一、 堪忍	四三
二、 斧と針	四五
一、 海舟の苦學	四七
二、 心の修行	五〇
三、 物の上手(俚言)	五四
四、 スパルタ武士	五六
五、 日嗣皇子	六三
六、 余が軍隊生活	七〇
七、 櫻井驛の訣別(新體詩)	七五
八、 リンカーンの少年時代その一	七九
九、 リンカーンの少年時代その二	八四

二〇、 倫敦の汽車(書簡文)	八八
二一、 ペンギン	九三
二二、 富士山その一	一〇一
二三、 富士山その二	一〇七
二四、 夏の興	一一二
一、 月見草	一一二
二、 涼しき夕	一一四
三、 釣瓶の水	一一六
二五、 陶工の苦心	一一七
二六、 忠義の犬その一	一二四
二七、 忠義の犬その二	一二八
二八、 やまと心(今様)	一三一

二九、 明治天皇の御遺物を拜すその一……………一三三

三〇、 明治天皇の御遺物を拜すその二……………一三九

三一、 加藤清正……………一四九

三二、 人の一生……………一五七

三三、 笑話三則……………一五九

一、 タレス……………一五九

二、 ラフォンテーヌの機智……………一六〇

三、 頓智で一命を拾ふ……………一六一

三四、 天の橋立……………一六二

三五、 満珠干珠その一……………一六六

三六、 満珠干珠その二……………一七〇

卷一 目次終



新定中等國語讀本卷一

一、 青年の覺悟

父母に對し、兄弟、姉妹に對し、師長に對し、朋友に對し、又世間一般の人に對しても、我等は、常に、まごころ、即ち誠を以て接しなればならぬ。さりして、いつも、學生としての本分を忘れてはならぬ。常に、父母の惠、師の惠、大御代の惠を思はなければならぬ。我等を、我等一人の物と思つてはならぬ、我等は、父母の子で、家

の人である。我等は、陛下の臣民で、國の人である。我等は、自愛、自重しなければならぬ。さうして、有爲な人物と成長しなければならぬ。

「若い時は、二度はない。全く、二度はないから、若い時に勉強しなければ、老いて後、必ず悔ゆる時が来る。むかし、徳川頼宣が、大阪の役の初陣に、戦功の無いのを歎いた時、或人が、御年少の御身、今後、幾度も、よい機会が御座いませう」と慰めると、頼宣は怒つて、我が十四歳の時は、再び来るかと云つたのである。頼山陽は、十二歳で、立志論を作つて、男兒、學ばざれば、則ち已む、學ば

徳川頼宣
家康の第十子。紀州藩祖。
(一六二二年—一六八二年)
名は襄、通稱久太郎、安藝の人。漢學者にして、最も史筆に長ず。(二四〇年—二四九三年)

ば、則ち、まさに、群を超ゆべし」といつた。その外、今日の中學生位の年配で、すぐれた事業を成した人が、昔には、澤山ある。

人生を、四季に譬へれば、青年は、人生の春である。人生の、最も楽しい時である。希望の光は、前途を照して輝いて居る。我等は、春の野山に歌ふ鳥の如く、快濶に、屈託なく、志望を遠大にして、學を修め、業を習はなければならぬ。野山に咲きつづく花が、夏時に至つて、皆、それぞれの實を結ぶやうに、智能を啓發し、徳器を成就しなければならぬ。

古津、杵築の岬、菌の長濱
共に出雲國簸川郡
三瓶山
石見國安藝郡

秋鹿郡
今廢して八束郡に入る。

えいやえいやと手ぐり、そろりそろりと引き寄せて、「國來い、國來い。此處まで來い」と、とうとう引き附けて、縫ひ合はせられたのが、古津から杵築の岬の邊である。この國引の綱を繋ぎ止めた杵が、即ち今の三瓶山といふ山、又、その綱は、今の菌の長濱である。

まだ、これでも、出雲の國が小さいので、この度は、北の方に、國のあまりは無いかと、御覽になると、滿洲の方に、大分廣い處が見えた。早速、其處を切り分けて、又もや、三撚の綱をうち掛けて、國來い、國來い。此處まで來い」と引き寄せて、接ぎ合はせられたのが、秋鹿郡あたりである。

「今すこし足さう」といはれて、東北の方を探して、この國のあまりを引き寄せて、また、これをも縫ひ附けられたので、とうとう、今日の出雲の國が、すつかり出來上つたのである。

神代から、幾千年を経た明治四十三年になつて、あの、ちぎり残の朝鮮の全部が、遂に、悉く、我が日本に引き附けられてしまふことになつたのも、面しろい譯である。(日本古事記噺)

三、我が國花

Cherry チェリー
まがふ

わが日本の國花として、世界に誇るに足るものは櫻であらう。今、支那でいふ櫻桃が、櫻に相當するといふことであるが、日本の花の美しさには及ばないとのこと。西洋のチェリーも、實は大きい、花の色は薄い。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め、谷に満ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本特有の美景である。

支那の國花は牡丹である。その濃艶な粧は、美しいには、相違ないが、あつさりとした日本趣味ではない。香氣、鼻を衝く薔薇の花も、棄て難く、美しいものである。

るが、これも、艶冶の態があつて、清楚人を動す野趣に乏しい。しかし、薔薇は、歐米人の花の王と稱するものである。

日本の櫻は、その色は、極めてあつさりとして居る。但、純白ではない、いはゆる櫻色である。その瓣は、極めて薄い。一樹に無数の花を著けて、咲く時は、一時に、爛漫と、残なく咲く。上品な大宮人の風もあつて、楚楚とした野情もそはつて居る。空青く、水清い日本の景色には、最もよく釣り合つて、深山、都市、どこにあつても、皆宜しい。甘日草の、長い盛もなく、薔薇花の、高い香氣

空に知られぬ雪

拾遺集、紀貫之「櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」。

花ぐはし櫻
日本書紀に見ゆ。允恭天皇の御製。

照りもせず
云云

新古今集、大江千里「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」。

も無いが、とにかく見事である。その散つて、空に知られぬ雪と降つては、一段の風趣があつて、殆ど、言語に絶してゐる。日本の花の中の花は櫻である。古く、花ぐはし櫻と歌はれたのは、蓋し、これが爲である。

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は、水蒸氣が多い。晝は、どんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない。花曇、夜は、照りもせず、曇りもはてぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には、最もふさはしい景色である。春の特色は、どこまでも、駘蕩といふ點にあり、温和な所にあり、峻 嚴猛烈といふ心の、微塵もない所にある。櫻は、この時

吉野山の歌
八田知紀の作。

花の雲の句
松尾芭蕉の作。

鐘一つ云云
櫻本其角「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春」。

候に孕まれて咲き出る花である。きは立つた特色の無い所が、即ち、その特色である。

「吉野山、霞の奥は、知らねども、見ゆる限は、櫻なりけり。これは、満山、花に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。花の雲、鐘は上野か、浅草か。これは、鐘一つ賣れぬ日もなき、大都會の花に掩はれた光景である。櫻は、牡丹、薔薇のやうに、花瓣を賞翫する花では無くして、木として賞翫する花である。否、多くの木を集めて、人は、唯、花中にあつて、賞翫する花である。上から、のぞいて、愛でる花では無くして、下から眺めて愛でる花

である。春風四月、日本人は、しばし、花の世界の人となるのである。(芳賀矢一「月雪花」)

四、水車 (尾上柴舟)

とほし

のぼらば瀧につづくらん、
岩きりとほしゆく水の、
流の岸の小屋見えて、
あやふくかかる水車。
ただかりそめの板ぶきに、

のせたる石も苔むしぬ。
ささぬ窓より見入るれば、
守りたる人はまだ若し。

山のあらしやたちぬらん、
人にしられぬ谷の花、
あをき流をいろいろに、
染めてもここによりて來ぬ。

つと汲まれたる山櫻、

くれなる。

ただしろたへに一めぐり、
めぐると見ればうち續き、
のぼる椿のくれなるや。

み山の春を手ずさみの、
やうに汲みては汲みこぼし、
ながきひねもす飽かぬまに、
車も老いんはた人も。

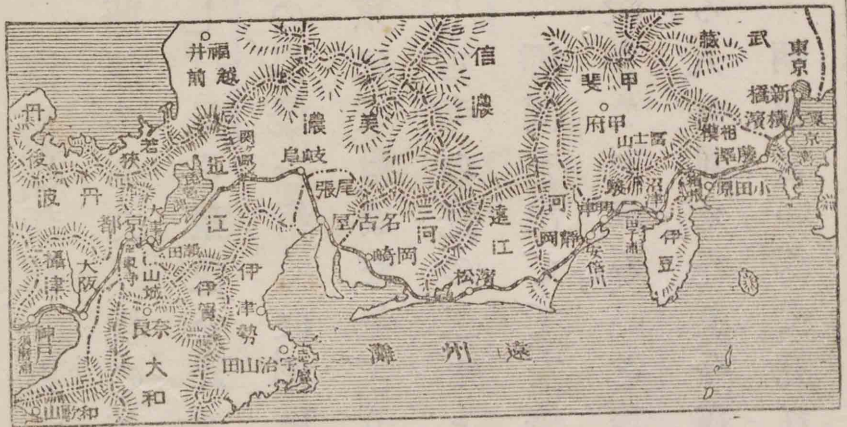
五、春の旅

なほ。

汽車は、新橋を出でぬ。雨、しめやかに降り出でたり。
藤澤のあたり、桃の花盛なり。緑なる松、紅なる花、しば
しば見る景色なれど、なほ珍し。駿河路になりて、興津
の海邊を行くに、櫻は、ここかしこに咲き亂れたり。東
京にては、まだ見ざりしを、浦風の暖きがためなるべ
し。古寺の庭の二もと三もと、雪か、霰か。

まじる

静岡を出でて、安倍川を渡る。岸の麥生に、菜の花の
咲きまじれる、いと美し。雨傘として、汽車をながめ居
る人も見えたり。今夜は、濱松に宿る。雨、なほ止まず。
朝起きいって見れば、空霽れたり。神武天皇祭とて、



到る處に、國旗の翻れるを見る。
 名古屋よりは、乗客充滿して、箱
 に、蜜柑を詰めたるが如く、身動
 もならぬほどなれば、景色も、何
 も見えず。されど、時々、立ち居る
 人の袖の下などより、纔に、山青
 く、水白きを眺めつつ行く。近江
 路、春寒くして、瀬田のあたりの
 菜種、いまだ、濃き山梔子色に至
 らず。

東寺
 眞言宗の總本
 山にて、教主
 護國寺とい
 ふ。



京都に著きたれども、
 人多くして、東山も見え
 ず、西山も見えず。窓近く
 立てる東寺の塔だに仰
 がずして、已みぬ。大阪を
 出でて、神崎川を渡る。菜
 の花多し。盛は、かへさ頃

ならん。薄暮、神戸に宿る。

けふ
 けふは、日よし。山陽線の汽車に乗る。窓より見れば、
 朝日、花やかにさし上る。いと、心地よし。忽に、須磨は來

あはち
(淡路)

りぬ。帆を張りて出て行く舟、漕ぎつれて浮べる舟、磯にかかれる舟、引き上げられたる舟、とりどりに面白き浦の景色なり。淡路島、ちかく、松のひまより見ゆ。舞子に著く。處の祭なるべし、舞臺めきたるものありて、杉葉もて、屋根を葺き、松の枝もて、欄干を渡し、酸漿提燈を懸けならべたるが、松の木の間に立てり。春風、緩に來りて、奉納の旗を、ひらひらと吹く。
大久保などいふを経て、土山に著くころ、平原一帯、緑の麥生に、黄なる菜の花の咲きまじれるも美しきに、一たび別れし海さへ、再び、あなたに、廣廣と見渡さ

ある(藍)

岡山の城
岡山市にあ
り。維新前ま
で、池田氏こ
れを治む。
たはむる
(戯)

れたり。藍もて描かれたる遠山、碁石のごとく並びたる白帆、面白き景色ならざるはなし。このあたり、櫻は、いまだ、荅を解かねど、柳ひとり、芽をひろげて、われは顔に靡き立てり。

岡山の城見ゆ。柳、處處にありて、末は、霞に包まれたり。線路の土手に、蒲公英、董などの咲けるを見つつ行くも、樂し。黄なる胡蝶三つ二つ、花に戯れては、遠く去り、復、近くきたる。

笠岡を出でて、海に沿ひて行くに、何がし丸などいふ旗立てたる大船の、磯近くかかり居るも見ゆ。間も

舊城
福山城といふ。維新前までは、阿部氏これを治む。

なく、福山に著きぬ。この地は、屢遊びし處なれど、汽車の出で来てよりは始めてなれば、何處やらん、面影の變れる心地す。ただ、何よりも嬉しきは、舊城のいちじるく高く仰がれたることなり。蘆田川を渡れば、兒童十四五人、運動會めきて、旗立てて、河原の芝生に遊び居り。なほ行けば、小川に、釣垂るる人、堤に摘草する人、田舎の春は、到る處にのどかなり。われは、城の見えずなるまで、顧みつつ行く。

をちこち
(遠近)

海田市のあたりより、やうやう暮れて、遠近の山黒く、空、いと靜なるに、黄金の鎌の如き三日月は、高く、鋭

く、光を放てり。

廣島に著きたるは七時なり。この地も、二十餘年の昔、三年の書生生活をなししところなるが、今、ふたたび来て見れば、さながら、浦島の翁のこちもするかな。(大和田建樹―雪月花による)

六、田舎より

拜啓。その後、御起居如何に候や。昨秋、一家擧つて、この地に移り候ひてより、往來する友もなく、ただ日日、一里の道を、通學致すのみにて候ひし

浦島の翁
日本書紀雄略天皇二十二年に、丹波國與謝郡管川の人水江の浦島子、海に入り、蓬萊山に到る。

おのづから

が、この頃の春の景色に、おのづから、心もりき立ちて、休日毎に、弟妹と相携へて、田野の間を散歩致し、をりをり、例の水彩畫をも試み申し候。そのうちより、最近のもの一枚、ここに、説明相添へ、進呈致し候間、御笑覽下されたく候。

うるはし

小川の傍に、高き松の聳えたる、その下の藁屋が、僕等の住居に御座候。土橋の上に立ちたるは、弟と妹とにて候。川の堤に、様様の色うるはしきは、若草の中に、堇花、蒲公英、蓮華草などの咲き亂れたるにて、その中には、土筆も多く、妹などは、時時、

さへづる
(囀)

前垂に一杯にして歸り候。堤のあなたに、緑の色濃きは麥畑にて、まだ、穂は出でず、菜の花は咲き満ちて、舞ひをる蝶を招きをり候。

野も山も、一面に、火鉢の上に、火氣の昇るが如く、ちらちらと、ものの動き候。これは陽炎といふ由、晝にはかけ申さず候。雲雀も、晝中には入らず、青天に、一點の塵と見ゆるほど小く、聲ばかり大くなるが、やがて、ふつと啼き止みて、逆おとしに、麥畑のうち、に落ち候。山陰の藪には、今も、鶯の囀りをり候。この邊にては、夏の頃までも、かやうに啼

き續くるよしに御座候。

この度は、これにて、筆を止め候。都の友の消息もゆかしく、上野、日比谷の春色も思ひやられ候。御近況御知らせ下されたく候。草草。(藤岡作太郎)

七、烈風中の飛行

四月十日は、わが東京に於ける第一回飛行の第三日であつて、黎明以來、天候不穩で、太陽の昇るに隨つて、風力が益加つた。

練兵場に至れば、黄塵濛濛として、咫尺を辨ぜぬ有

四月十日
大正六年。

練兵場
東京市内青山
にありき。

かほ(顔)

様であつた。これでは見物人も來まいと思ふと、驚くべし、はや、數千の群衆は、場内に詰め掛けて居る。人人の顔は、埃で眞黒であつた。靴も、著物も、頭髮も、すべて、埃の色であつた。

埃の中を、大骨折て歩いて、機械に近づいて見ると、埃が、發動機の上に、山の如く積つて居る。この埃を、揮發油で洗ひ去らなければ、スタートが出来ぬ。しかし、如何にして、發動機を洗ふかが問題である。洗ひ清めた瞬間、又もや、埃が積るからである。そこで、中央よりは、埃の比較的少い、場内の隅の方に、飛行機を移して

スタート
Start

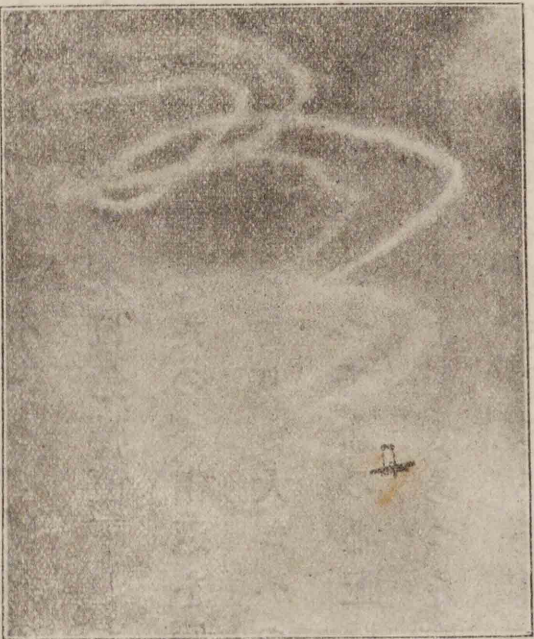
米突
Metre 一米突は我
が曲尺の三
尺三寸。

三千呎
Feet 一呎は我が
一尺六厘。

此處で、發動機を洗つた。洗ふや否や、布片を被せて、スタートするまでは、埃の入らぬ様にした。愈、飛行の時間が來たので、余は機上の人となつた。そして、布片を取り除けるや否や、スタートした。この風力は、中央氣象臺の公報によれば、一分間三十二米突であつた。

米國でも、余は、随分、強風中に飛んだ。しかし、米國では、風は、地面では強くても、空中、約三千呎に上れば、殆ど平穩である。余は、同様の期待をもつて、高く高く飛揚したけれども、風は、益強く吹くばかりであつた。空

七十五哩
Mile 一哩は我が
十四町四十
五間餘。



スミス夜の飛行

氣の状態は、米國とは、全然反對である。嘗に強いばかりでなく、突風的で、始終、機を惱した。

風は、益強く吹き荒み、四千呎に達した時には、一時間七十五哩以上と思はれた。余の飛行機は、一時間六十五哩の速力である故に、全速力を出しても、この高空に於いて流されて、逆戻し

た。余の油槽が大きかったならば、余は何も困りはしないが、それが小さいので、風力のもつと弱い所に降りようと試みた。余は急轉直下した。約五百呎を下ると、風力、稍弱を覺えたので、宙返を始めたが、風のために、宙返の輪は、平常よりも大きかった。

降りるに當つて、余の心配は、埃のために、場内が、明瞭に見えないことであつた。故に、余は、氣をつけて、一陣の強風の吹き過ぎるを待つて、降下した。すると、次の一陣の強風は、黄塵を持ち來つて、發動機を埋めた。飛行中も、飛塵のために、場内の群衆を、少しも見ること

とを得なかつた。余の、安全に降下し得たのは、誠に天祐であつた。

事實、當日の風は、余が飛行した最強風であつた。余は、この強風に飛んだことを、嬉しく思つた。これに依つて、余は、平生、米國に於いても、亦、日本に來てからも、公言しつゝあつたことを、證明し得たからである。飛行家が、どんな時でも、自在に、飛行機を操縦し得る術を、會得した時には、如何なる強風でも、又、如何なる場合、に在つても、飛行し得べきものであるとは、余の確信する所である。(アトリスミスー日記から)

八、 蒔かぬ種は生えぬ

「蒔かぬ種は生えぬ」といふ諺は、常々人のいふ所で、骨を折らなければ、善い報酬を得ることは出来ぬとの戒で、勉強労働の方に、人を導く爲に用ゐるから、大いに、世を利用するものであるが、生物學の方面に向つては、蒔かぬ種が生えるやうな考を持つて居る人がおほい。昔は、蛆といふものは、肉などが腐ると、そこへ、自然に涌くものであると信じて居つたが、イタリヤ人のレヂといふ學者は、實驗によつて、このことの、眞

うじ(蛆)

イタリヤ

Italy

レヂ

Redi

トスカナの大
公の侍
爵の二
五六年(一
七二二)
七年)

であるか、ないかを確かめようと思つて、こまかい金網で、肉を蔽つて置いた所が、何日過ぎても、何ほど、肉が腐つても、蛆が、一疋も出来なかつたので、蛆は決して、種のない所に、自然に涌くものではない、全く、蠅が来て、卵を生み附けるから、それが孵つて、蛆が生ずるのであるといふことを知つた。

生物學上で、「蒔かぬ種は生えぬ」といふことが解つたとして、人間の生活上に、何の役にも立たぬと考へる人もあらうが、實は、この理は、現今の世の中で、非常に、人生を益して居る。近來、大いに發達した消毒法など

もとゐ(基)

は、全く、この理を、實地に應用したものに過ぎない。もし、病氣の基となる、微細な生物が、種がなくても、自然に湧くものであるなら、當今の消毒法は、何の役にも立たぬ筈である。又、當今、盛に行はれて居る食物の罐詰なども、この學理によつて工夫したもので、物の腐敗するのは、目に見えぬ、小さな生物の働であるから、この生物の種の舞ひ込まぬやうに、食物を封じて置けば、何時まで置いても腐らぬ筈であるといふ理窟から考へ出した法である。

この外にも、蒔かぬ種が生えるといひ傳へて居る

ゆゑ(故)

ことは、種種あるが、いづれも、觀察の粗漏である故か、又は、推理の法が精密でない故かに原因する。例へば、新しく掘つた池に、翌年から、蜆が湧いたとか、鰻が湧いたとかいふことは、屢聞くことであるが、一寸考へると、これらの動物は、なかなか、乾いた地の上や、又は、空中を飛んで行く力はないから、山の高い所などに新しく掘つた池に居るのは、全く、その場所に、自然に湧いたのに、相違あるまいとも思はれるが、十分に調べて見ると、鰻でも、蜆でも、随分遠く隔つた所まででも行けぬとは限らぬことが解る。鰻などは、元來、海中

て孵化するもので、初は、幅の廣い、透明な、白魚のやうなものであるが、成長するに隨ひ、身體が、だんだんに縮り、幅も狭くなり、色も、次第に、黒くなつて、所謂針鰻に變ずる。この針鰻は、幾千も幾萬も、群をなして、河を溯り、次第に、細い溝などへ進み、雨でも降るときは、隨分、道路を横ぎつたり、草の間を匍つたりして、どこまでも進んで行く性質を持つて居るから、終には、山の頂に近い所の池にも達することが出来る。鰻の發生の模様は、近年まで、詳しくは知れてゐなかつたが、今は、十分に解つて、これまで、海濱で、屢人の採集した、び

うを

いどろうをは、全く、鰻の幼兒であるといふことが、慥になつた。

又、貝類などが、新しい池の中に生ずることは、鰻よりは、餘程不思議に思はれるが、やはり、これも、外から移つてくる方法がある。貝類の幼兒は、二枚の殻を開閉して、雁鴨などの羽毛に附著することがあるから、一方の池から、他の池へ、貝の種が舞ひ込むことは、決して、珍しいことではない。現に、或人が、銃獵に往つて獲た鶴の足に、大きな貝が挟み附いて居たこともある。よく調べて見ると、貝類などの、あまり運動せぬ動

めづらし
(珍)

て、遙に、漫漫と開いた碧の海を望むことが出来る。かやうに、山と海との、えならぬ眺を兼ねたりへに、湖の面には、時々、蘆荻の生ひ茂つた間に、鷺鷥の、閑眠を貪るのが見え、又、仙人めいた舟子の、網を擧げて、細鱗を捕るのが見える。景色の雅なこと、誠に、一幅の名畫を展げたやうな趣がある。

見える

今は昔、このあたりに、湖山長者といふ、名高い豪家があつた。住家は、王侯の宮殿のやうで、その中には、金銀、財寶が積んで、山をなして居た。衣るには、美しい綾錦があり、食ふには、山海の珍味があり、使ふには、數十

百人の婢僕があり、そして、所有の田地は、見渡すかぎり廣廣と、稻の波を打つて居た。たとへば、天下の富を、此處に集めたかと思はれるばかりで、世の中の事、何一つ、この長者の思ふままにならぬのはなかつた。

ある年の夏の田植時のことである。湖山長者の家では、季節中の最上吉日を卜して、この廣田に、田植をする事になつた。長者の家に使はれてゐる者は勿論、近郷、近在の者どもまで、今日こそ長者の田植だといふので、老幼、男女、數をつくして、身支度かひがひしく、我も我もと、田圃をさして、出掛けて行く。長者は、高

たうる。
(田植)

殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を、遙に見渡しつ
つ、おのれが限ない富に、思はず、得意の微笑を漏して
ゐた。

仕事は、面白いやうに運んで、早苗を取る男女の手
の動く度毎に、濕つた、黒い土の色が、片端から、青く青
く變つて行く。そのうちに、正午になつた。やがて、夕暮
近くなつた。仕事は、めきめきと運んだが、名に負ふ長
者が、廣い田地のことであるから、植ゑるに果しなく、
まだ、數段を残してあるうちに、日は、はや、西の山に入
らうとした。

あふぎ(扇)

長者は、これを見て、ああ、今少し、日が高くば、全體、め
でたく濟まりものをと、しばし、深い思に沈んだが、つ
と立つて、黄金の扇を持つて來て、さつと開いて、今し
も沈まうとする夕日を、三度までさし招いた。

見る間に、山の端にかかつた夕日は、三段ばかりの
ぼつて來た。田に立つた村人等は、天道様を左右する、
長者の威力を見て、いかに驚いたであらう。かくして、
これまでと思つた田植も、思ふままに抄つて、その日
も、無事に暮れた。

寢覺の牛の聲が、ゆるやかに響いて、夏の短い夜は、

やがて明けた。朝の床を起き出た長者は、入日を招き返した喜と心驕とで、眼中、いよいよ、何ものもない。傲然とした態度で、召使や村人を呼んで、昨日一日で植ゑあげた田の様子を見て来いと命じた。ところが、出掛けて往つて、誰一人、腰を抜すばかりに驚かぬ者はなかつた。

驚くのに、無理はない。

見よ、さしものに廣かつた長者の田地は、迹形も無くなつて、漫漫とした湖が、朝の嵐に、白い波を立てて居るではないか。數千人で、一日植ゑつけた早苗が、一本

みづらみ
(湖)

も見えないで、渚には、群れ立つ蘆アシが、波に洗はれ、風に戦いで居るではないか。

長者の家は、この時から、一日一日に衰へた。そして、遂に、この廣い田とおなじ運命をもつて、亡びてしまつた。(五十嵐力一趣味の傳説)

一〇、狂夫の言

一、堪忍

或人、文盲なるものを意見して、世の交は、他の事は
いらず。ただ、堪忍の二字を、よく守るべしといふ。文盲

の人、首を傾け、かんにんとは、四字にて侍らずや」と、指にて數へ、御許には思違なるべし。かんにんの四字にて侍り」といふ。意見せる人、愚昧の人かな。堪忍とは、たへしのおと書きて、二字なり」といへば、また、首を傾け、「たへしのおならば、又、一字殖えたり。五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は、四字と思ひ侍れば、四字にて、かんにんは致し侍るなり」といふ。かの意見せる人、またいふ、汝が如き愚昧のものは、實に諭しがたし。人に似て、蟲同様なり。己がままにすべし」と、大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも、仰あるべし。我等は、か

んにんの四字を知り侍れば、惡口せられても、少しも腹立ち侍らざるなり」とて、笑ひ居たりきとぞ。 (柳澤洪

園—雲萍雜誌)

二、斧と針

今の人の、或は、學に志し、あるひは、藝に志すもの、一旦は、憤を起して、晝夜をわかたず、勉強勵むといへども、已に、一月を經、半月を過ぐれば、怠る心はやく生じ、わが勤の至らざることはいはで、性質の過に委して、これを廢す。馬は速しとても、朝、暫く走りてやまんに、はいかでか、牛の、終日あるかんに及ぶべき。谷間の石

の磨かれ、井桁の圓くなるも、豈、一朝一夕の力ならんや。今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず。然して後、その效あり。人、一生の力を、その道に用ゐてすら、なほ、その奥儀に到るは易からず。況や、わが一月半月、乃至一年半のつとめを以て、他人一生の功に比せんとするをや。思はざることの甚しきなり。

昔、李白、書を、匡山に讀みける時、やうやく倦みて、出でて遊ぶ。道にて、老人の、石にあてて、斧を磨するに逢ふ。これを問へば、針となさんとて磨するなり」といへるに感じて、つとめて、書を読み、遂に、その名を成せり

李白
字は太白、青蓮と號す。唐の大詩人。(一三六一年—一四二二年)
匡山
匡廬山のこと。

といふ。(三浦梅園—梅園叢書)

一一、海舟の苦學

勝海舟、若き頃、西洋式の兵術を學びしが、船載の兵書、極めてすくなく、常に、良き書の得がたきを歎ぜり。偶、市中の書肆を過ぎて、新刊の一書を見、これを購はんと思ひて、その價を問へば、五十兩と答ふ。當時、書生の身分なれば、五十兩の金は、直に得らるべくもあらず。十數日を経て、辛うじて、これを調へ、勇んで、書肆にゆけば、かの書は、既に賣れてなし。海舟、遺憾にたへず、

勝海舟
名は安芳、舊幕の傑士。のち海軍卿を経て、樞密顧問官となる。(一四八三年—一五五九年)

買ひたる人を問へば、四谷に住める與力某なり。即ち、歩を轉じて、これを訪ひ、切に情を陳べて、兵書のゆづ

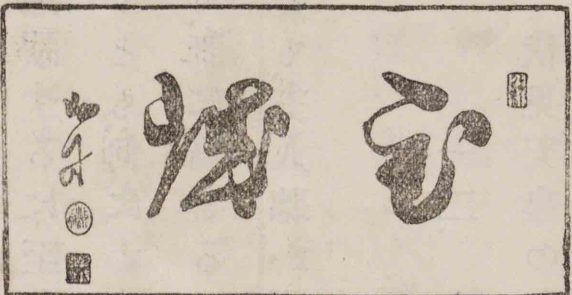


勝海舟肖像

りわたしを請ふ。某聽かず。已むを得ず、借覽を請へども、なほ聽かず。乃ちいはく、「晝間は、足下に、要あらん。夜間、寝ねたる後は、貸さるとも、不可なかるべし」と。某、その執拗に驚き、答へていはく、「夜更けて後は、貸すとも可なり。然れども、戶外に持ち去ることを許さず」と。海舟、その翌夜より、通勤を始

む。

當時、海舟は、本所に住み、某の家は、四谷に在り。相距ること、殆ど一里半。されど、雨風烈しき時も、曾て、往復を廢せず。又、一夜も、その時刻を差へず。かくの如くすること半年餘にして、遂に、八卷の兵書を手寫するを得たり。乃ち、更に、主人に面會し、全部を寫し了へたることを告げて、その厚意を謝し、かつ、二三の不審の點を舉げて、これを質す。主人驚いていはく、



をふ(了)

「僕は寫すべき勞もなきに、足下の如く、いまだ全部を通讀するに至らず。實に、慚愧にたへず。野人、寶をもてりとも、何にかせん。請ふ、この書を、足下に呈せんと。海舟、既に寫せる一部を有すればとて、再三固辭したれども、主人聽かず。遂に、これを受けぬ。(海舟言行錄)

つひに
(遂に)

一一、心の修行

伏見天皇の御代に、日本全國から、刀工十八人を選び出して、各一振づつの刀を徵されたことがあつた。その中で、第一の選に當つた刀が、天皇の御守刀にな

るといふのだから、諸國の名工は、みな、畢生の腕前を揮つて、その刀を鍛へ上げた。

郷義弘
右馬允と稱す。
生死年代未詳。

當時、日本一の刀鍛冶と、人も許し、自らも誇つて居たのは、越中の國松倉の人、郷義弘である。義弘は、當時、刀打つ業では、恐らく、自分の右に出づるものはあるまい、自分こそ、必ず、第一の選に預るに、相違ないと思つて居たところ、思の外に、相州の正宗が第一といふことに定められた。義弘、これを聞いて、かれ正宗は、刀を打つよりも、世わたりの方が上手で、賄でも使つて、この僥倖を得たのであらう。よし、それならば、こ

正宗
岡崎五郎入道と號す。(一九二四年—二〇〇三年—一説による)
まひなひ
(賄)

れから、相州に赴いて、一刀に斬つて棄てようと、決死の勢で、越中の國から、はるばる、相州鎌倉へ出かけて往つた。

義弘は、正宗の家に著くと、丁度、仕事場には、槌の音が聞えたので、まづ、その窓から、中の様子を覗つて居たが、忽ち、何を悟つたか、今までの勢、何處へやら、しほしほとして、玄關にゆき、刺を通じて、正宗に、面會を求めた。

正宗は、有名な義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義弘は、初對面の挨拶を、慇懃に述べて、さて、正宗殿、何を

しほしほ

隠さう、自分は、今日、貴殿と腕くらべして、様子によつたら、貴殿を討ち果す覺悟で參つたところが、今、よそながら、貴殿の仕事振を拜見して、自分の、遠く及ばないことを悟りましたから、懺悔の爲に、御話し申す。一體、自分は酒ずきで、仕事場に、酒を置くことがあります。暑い時には、兩肌脱いで、刀を打つこともあります。今、貴殿の、刀を打たれるさまを見ると、わが身のはしたない心掛とは、雲泥の相違、仕事場には、かうがうしく、注連繩を張り、隅隅まで祓ひ淨め、貴殿も弟子も、折目正しい袴をつけて、威儀堂堂と、槌を取られる。その眼は、

ことはつた
(斷)

すこしも、外を視ず、その心は、すこしも、外に散らず、身も魂も、その刀に乗り移るかと思ふばかり。それ程の丹誠を籠めてこそ、天下の名刀も打ち得られることと感じ入りました。今まで、腕一つで、刀打つものと心得て居たのは愧しい。どうか、今から、貴殿の弟子として、心の修行をさせて下されと、懇に頼んだ。正宗は謙遜して、一旦斷つたけれども、義弘の熱心已み難いを見て、遂に、弟子にしたといふことである。(村井弦齋)

一三、物の上手

すきこそ物の上手なれ。

朱に交れば赤くなる。

良薬は口に苦し。

人は一代名は末代。

七ころび八起。

一寸の蟲にも五分の魂。

人を呪はば、穴二つ。

めくら、蛇におぢず。

問ふに落ちずして、語るに落つ。

痛し痒し。

獅子身中の蟲。

一四、スパルタ武士

昔、ギリシヤに、スパルタといふ國ありき。國民、愛國の精神燃ゆるが如く、武勇のほまれ、今、なほ高し。而して、スパルタ人の教育の方法と、生活の状態とを聞くものは、この聲譽の、偶然にあらざるを知るべし。

スパルタ人は、悉く武士にして、男子うまれて、七歳に達すれば、國立の教育所に收容せられ、王子、王族といへども、家庭に人となるを許されず。その教育は、身

Greece
ギリシヤ
Sparta
スパルタ

體の鍊磨と、士氣の養成とを主とし、日常の學課は體操、武術、劍舞、軍樂等にして、讀み書きの如きは、餘力を以て、これを學ぶに過ぎず。

教育所における少年、青年の生活は、専ら、廉潔、質素、克己、忍耐の氣性を鍛鍊するを目的とし、その規律は、頗る嚴格なるものなりき。寝ぬる時は、僅に一枚の敷蒲團を用ゐるのみ。その蒲團は、河邊の蒲の穂を集めて、自ら、これを作らざるべからず。衣服は、重著を許さず。冬も、なほ徒跣にて、靴を穿つを得ず。毎日、河水に浴して、温湯を用ゐることなく、食物も、亦、極めて粗惡に

もちゐる
(用)

して、飽食することを許されず。これ、他日、戰場に出て、飢渴に耐ふる習性を養はんが爲なり。

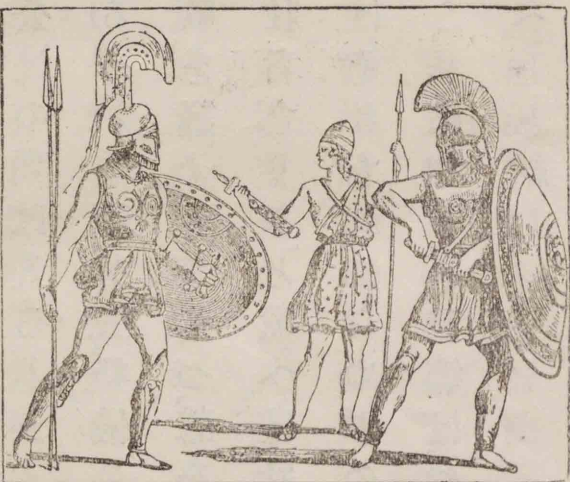
言語は、簡明を貴び、饒舌を誡む。故に、今日において、西洋諸國にては、言語の、簡單明白なるを、スパルタ人の答と言へり。又、謙讓と從順とは、スパルタ武士の、最も重んずる所にして、長幼の序正しく、未成年者は、路を行くにも、兩手を、マントの下に入れ、視線を、地上に垂るるを禮とし、揚揚闊歩するを得ず。公民は、總べて、未成年者を懲戒する權利を有し、懲戒を受けたる未成年者、若し、これをその父兄に告ぐる時は、父兄は、

更に、これを懲戒する義務あり。

二十歳に達すれば、始めて、共同の教育所を出でて、公民の列に入る。しかも、武藝の練習は、終生、これを怠るべからず。公式、祭儀の席には、老若相合して、武勇の歌を誦す。老人、まづ、聲を上げて、我等は、嘗て、武勇なる壯者なりきと歌へば、壯年、これに次ぎて、我等こそ、今はそれなれ。知らぬものは、いざ試みよと歌ふ。少年、亦これに和して、我等は、やがて、更に武勇なる壯者たるべしと結ぶ。

かくの如き尙武教育に鍛はれたるスパルタ武士

瓦となりて
云々
北齊書に「寧
玉碎すべき
も、瓦全なる
能はず」。



士 兵 の ヤ レ リ ギ

は、死を見ること歸するが如く、瓦となりて、全からん
よりも、玉となりて、碎けん
ことを希ひ、祖國の爲に、一
命を捨つるを以て、無上の
名譽とせり。
ここに、スパルタ武士の
面目の一端を見るに足る
べき、二三の美談を記さん。
敵の軍勢、山野に満ち、大小の軍旗、空をおほひて、天
日見えざとの報に接し、大將、自若として曰はく、然ら

ば、その蔭に戦はんと。

「敵勢、雲霞の如く、その數を知らず」といへば、一將、喜
んで曰はく、敵勢大なる時は、我等の名譽も、亦、随つて
大なり」と。一將、又曰はく、我等は、敵軍の數を知る要な
し。唯、その所在を知れば足れり」と。

「敵軍、將に寄せ來らんとす」と報ずるものあり。將軍、
叱して曰はく、敵、我に寄するに非ず。我敵に寄するな
り」と。

スパルタ人の忠勇義烈なるは、ひとり、男子のみに
非ず。女子も、亦、この美德を分てり。一婦人、その子の出

さづく
(授)

陣に際し、自ら盾を取りて、これに授けて曰はく、勝ちて持ち歸れ。然らずんば、これに乗りて歸れ」と。

或時の戦に、一時に、五子を失ひたる母あり。人あり、來りて、これを告ぐれば、まづ、勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てりと聞きて、喜んで曰はく、我が子は、祖國の爲に、これを産めりと。

又、或時の戦に、討死したる勇士の母は、花冠を被りて、街頭に集り、互に、その子の名譽を祝し、敵の包圍に陥りたる將卒の母は、固く、戸を閉ぢて出でず。私に、その子の武運拙くして、祖國の爲に死すること能はざるを悲めり。(國定讀本)

一五、日嗣の皇子

皇太子殿下から、私のまづ受けた第一印象は、その御聰明に渡らせられ、眞に、帝王の御資質を備へて居らせらるる事である。御性格といひ、御體格といひ、明治天皇の御面影の偲ばるる點が、非常に多い。

御身長は五尺五寸位、日本人としては、丈は、お高い方であらせらるる。御年配の割に、筋骨共に、よく御發達遊ばされ、眉が濃く、唇が、すこし厚く、それに、御聰明

そのものを語つてゐらせらるる御眼付は、何處からお見上げ申しても、先帝の御幼年時代をつくりて、御健康も、御近視眼の外は、殆ど、間然する所があらせられぬと、侍醫の方方から承つた。あの長い航海中、一度も、御食事を缺かせられた事がないのでも、普通人以上の御健康體であらせらるる事がわかる。これが、何よりも、國家の爲に祝しまつらねばならぬ點である。

次に、御性質はと申せば、極めて御快活に渡らせらるると同時に、御年配にも似合はせられぬ程、御思慮深く、寛容の徳に富んでゐらせらるる。例へば、何かの

Pyramid
埃及の古代
國王の墳。

Egypt
埃及

Programme
プログラム

手違で、プログラムの遅延やら、變更やらある場合などでも、いまだ、曾て、御不満の色を浮べられた事はなく、何時も、善意に解釋せられて、それは、却つて善からうと供奉の人人をお慰めになつた。埃及のピラミッド御遊覽の日は、折悪しく、稀に見る砂嵐で、衣服が、眞白になり、吹きつくる熱砂で、顔も、手も痛くてたまらぬ程であつたが、殿下は、却つて、砂漠の本氣分が味ひ得られてよかつた」と仰せられたさうである。何事も、光明の方面からのみ見て、少しも、暗黒面から見られないといふ御態度と拜察せられた。

小栗艦隊司令長官
海軍中將小栗
幸三郎。

新嘉坡
マライ半島の極南端、新嘉坡島の南岸。
Singapore

私の、最も感動したのは、御生來、仁慈の念に富ませられ、下下の勞苦に對する御同情の深いことである。東京御出發前、殿下は、小栗艦隊司令長官に、石炭積込を見せて貰ひたいと仰せらるると、長官は、非常に恐懼して、何分にも埃だらけでと申し上げた。すると、いや、その穢い作業を、特別に見學したいのだよと仰せられたが、果して、新嘉坡での採炭最中に、殿下は、何時の間にか、採炭口に、歩を運ばせられ、炎天のもと、炭粉濛濛たる中にお立ちになつて、親しく、人夫や、水兵の流汗淋漓たる作業振を、御覽になつた。水兵等は、これ

を見て、俄に、勇氣百倍して、殿下が、かくまで、我々の勞苦を憐し給ふ以上はと、互に勵しあひ、普通二日に互る採炭も、その日のうちに、立派に終了したといふ。

今一つ、私が目撃した御逸事を物語らう。一夕、御召艦上で、活動寫眞の御催があつて、非番の乗組水兵一同にも、陪觀の榮を賜つたことがある。その時、殿下、及び供奉員は、自然、最前列に御著席になり、その背後に、士官や、水兵が、立つて拜觀した。映寫が始ると、殿下は、供奉員等に向はせられ、どうも、うしろの兵隊達に、よく見えさうもないから、皆、少し、頭を俯向けようぢや

ないか」と仰せられて、御自身から、約三四十分間も、ずつと低く、お頭をかかめてお出でになつた。かかることは、我我人民間でさへ、餘程、修養のある、且思ひやりの深い長者のみのする事で、多くは、反對に、自己の特權を、これ見よがしに振り廻す連中のみである。然るに、殿下は、帝國皇嗣の御身で、かくまでに、同情深く、御謙遜にましますのを見て、私は、いたく、感激の情に打たれたのである。

我我臣民には、一寸、想像のつかない點で、しかも、殿下には、著く目立つて、御見受け申し上げらるるのは、

Palastine
パレスチナ

どんな場合でも、決して、物に臆するといふ御氣分がなく、何時も、堂堂たる御言動を遊ばさるることである。始めての御外遊で、随分、風土、民俗の違つた處にお出でになつても、誰も、御注意申し上げぬのに、臨機に、適當な御挨拶をなされ、しかも、その態度は、頗る御立派であらせられた。埃及統監、英國元帥アレンビー卿が、ここより、聖地パレスチナは、程近く、鐵路十二時間で、遊覽が出来る」と語られた時、殿下は、言下に、卿が、赫たる武勳を樹てられた方面に遊ぶ餘暇なきは、遺憾の至である」と仰せられたので、ア元帥は、相好を崩

して、恐悦したとの事である。(加藤直士―御外遊陪從記)

一六、余が軍隊生活

余は、昨年、徴兵検査に合格して、當聯隊へ編入せられた。今は新兵として、毎日、ここで、教育を受けて居る。朝から晩まで、練兵に、餘念なく、殊に、檢閲が近づいたといふので、殆ど、烟草すらのむ暇が無い。やつと、舍内に歸つて、一息しようとする、と、古兵から、新兵新兵と呼び立てられる。又、軍事に關する學科が、いつも、夕食後と定つて居るので、まづ、消燈後、床に就いてからで

まづ。

くは。(鋏)

なければ、我が身で、我が身の心持はせぬ。

さうはいつても、これを、余が在郷當時に比べれば、まだまだ、何でも無い。鋤、鋏を擔ぎ、星を戴いて出で、月を踏んで歸る、いそがしい農家の生活、殊に、年中で、最もせはしい收穫時などと來ては、とても、こんな事どころではない。頑丈な體でも、それはそれは、眼が廻る位。昔から、諺にいふ、泣く子も、眼を開けとは、このせはしなさに、我が子を誡める言葉なのである。

人は、かれこれいふけれど、余は、誠に、軍隊が好である。寢起から、飲食から、坐作進退、皆時あり節あつて、今

まで、起居に、さだめが無く、不規律であつた者には、實に、善い躑である。余は、常に、これを、愉快に、心嬉しく思ふ。又、君の御爲、國の爲、一朝、事のあつた日には、これが御間に合ふ御楯でもあるかと思ふと、嬉しさは、身にも餘るほどである。

余は、また、器械體操が、大層好である。日課として、時、これを課せられるが、何時も、時間が少いので、解散の時には、名殘惜しく思はれる。それで、また、後から、自分一人でやつて見る。自分の得意な技術を、上官の干渉無しにやる、これがまた、頗る面白い。日曜などには、

外出する前に、ちよつと、運動場まで驅けつけて、鐵棒にぶらさがるのが例である。余は、まだ、これよりも好きなものがある。それは、野外演習で、練兵場の各箇教練とか、分隊教練とかで、練り上げた動作を、野外で、實地に活用するのだから、いふにいはれぬ興味がある。たとひ、假設でも、敵が設けてあるのだから、戦争の事どもが、目の前に髣髴として浮び出る。勇み立たないで居られぬ。

余が、最も好む所といふのは、まだ、これらの外にある。好むといふよりは、寧、熱心なので、それは學科であ

る。身體が、如何ほど強壯でも、軍事教練に、どのやうに長けて居ても、戰術が、如何に巧であつても、これを、實地に動すには、實に、その人の心が至らなければだめだと思ふ。それ故、將校が、最も、意を注いで教へて下さるのが學科である。否、精神教育なのである。余は、この學科が、最も大好である。なぜなれば、その初には、いつも、畏くも、天皇陛下から、吾等軍人の賜つた、敕諭を讀みきかせらるるが、その敕諭の中には、恐多くも、朕は、汝等を、股肱と頼み、汝等は、朕を、頭首と仰ぎてぞ、その親は、特に深かるべきと仰せられてある。われ等草莽

の一微賤も、かやうな、尊い救命を蒙つて、どうして、感激せずに居られようか。日本帝國の軍人たるものが、朕は、汝等を、股肱と頼みといふ敕を承つて、誰一人、感涙に咽ばなからうぞ。かういふ次第で、余は、まことに、軍隊生活をなし得たのを、幸福だと思つて、常に喜んで居るのである。

一七、 櫻井驛の訣別

青葉しげれる櫻井の、
里のわたりの夕まぐれ、

櫻井
孫津國三島郡
島本村。

正成

(一九五三年
—一九九六年)

正行

(一九八六年
—二〇〇八年)

兵庫

攝津國武庫郡

木の下かげに駒とめて、
 世の行末をつくづくと、
 しのぶ鎧の袖の上に、
 ちるは涙かはた露か。」
 正成なみだをうち拂ひ、
 わが子正行呼びよせて、
 「父は兵庫におもむかん。
 彼方の浦にて討死せん。
 汝はここまで來れども、
 とくどく歸れふる里へ。」

「父上いかにのたまふも、
 見すてまつりて我一人、
 いかで歸らん歸られん。
 この正行ももろともに、
 御供つかへん死出の旅。」
 「汝をここより歸さんは、
 わが私のためならず。
 おのれ討死なさんには、
 世は尊氏のままならん。
 はやく生ひ立ち大君に、

をしむ

仕へまつれよ國のため。
 この一ふりは去にし年、
 君の賜ひしものなるぞ。
 この世の別の記念にと、
 汝にこれを贈りてん。
 ゆけよ正行ふる里へ、
 母はいかにか待ちまさん。
 ともに見送り見反りて、
 別ををしむ折からに、
 又もふりくる五月雨の、

アブラハム
 リンカーン
 (二四六九
 年―二五二
 五年)
 Abraham Lincoln
 北米合衆國
 United states of America

み空の雲をとよもして、
 あはれ血になく時鳥。

一八、リンカーンの少年時代その一

完全無缺の人間は、古往今來、決してあるものでない。然し、完全に近い人物を求めたならば、アブラハム、リンカーンは、實に、その一人であらう。
 リンカーンは、北米合衆國第十六代の大統領であります。智あり、勇あり、義あり、愛あり、その徳は、萬世に輝き、その澤は、四海に溢れる人である。私は、今、この大

人物の少年時代の話をして、聊か追慕の意を表した
いと思ふ。

リンカーンは、西曆一千八百九年二月十二日、春雪
正にとけて、梅花綻ぶる時、ケンタッキー州中、當時ハ
ルデインと稱へた片田舎の、極めて貧しい丸木小屋
で、呱呱の聲を擧げた。

父は、憐むべき日雇で、日日他人の田畑に勞役し、母
は、炊事、裁縫、一切の家事を勤むる外に、他家へ、洗濯に
雇はれたり、近傍の森や林で、薪を拾うたりして、その
日、その日の、かすかな煙を立てて居つた。リンカーン

ケンタッキ
Hardin Kentucky I
ハルデイン

ひろふ(拾)

をしよ(教)



像肖ン-カンリ

は、七歳の時から、父に随つて、森に行つては、小い斧を
揮つて、開墾の業を助け、畑に出ては、鋤を執つて、耕作
の手助をもして、十年餘、寸毫の暇もなく、營營として、
勞動を續けた。

かかる貧苦の間にも、常に、彼を
教へ、彼を勵して、他日大成すべき
基をつくつた人があつた。それは、

誰でもなく、彼の母親であつた。この母親は、素性の賤
しきに似ず、至つて賢明な婦人で、常に、人間の價値は、
その身の貧富、貴賤によつて定るものでなく、その精

神の如何によるものであることを教へた。そして、御身を學校に入れて、學問をさせたいは、山山であるが、今の貧乏では、それもかなはぬ。せめては、母が覺えた一通を教ふるほどに、農事の暇に、精出して勉強せよと、懇にいひきかせて、第一に習字、次に讀方を教へ、朝は、早く起しては習はせ、夜は、疲勞を忍ばせては教へたが、不幸にも、リンカーンが十歳の時、あへなくなつたので、リンカーンは、天を仰ぎ、地に俯して、これを歎き悲んだ。

父は、もとより、日日の勞役に追はれて、その子を顧みる暇はなかつた。母亡き後のリンカーンは、闇夜に、燈火を失つた心地、せめて一年、半年なりとも、小學校に通ひたいと、切に、父に訴へたので、父も、餘の不憫さに、遂に、これを許した。リンカーンは、天にも昇る心地で、日日、九英里餘の路をも厭はず、一回の缺席もせず、に、田舎の一小學校に通つたが、哀にも、赤貧の爲に、僅僅九箇月で、復廢學せねばならぬことになつた。ああ、この九箇月こそ、彼が、前にも、後にも、一生涯中に受けた學校教育の全體である。

これより、彼は、また、日日、鋤を執つて、田畑に働く身

となつたが、或は種を播き、或は草を刈る時にも、常に一二の書卷を携へてゐた。その書は綴字書、算術書、文法書の三種であつた。彼の性の伶俐な、又その精神の不屈な爲に、耕作の暇暇に、露天の下で、教師もなくて、よくその意義を理解することが出来たのである。そして、遂には、この三書を、一章一句も残さず、悉く語記するやうになつた。

一九、リンカーンの少年時代その二

十三四歳の頃、その隣家にかねて、その名を聞いて、

ジョージ・ワシントン
米國初代の
大統領（二
三九二年―
二四九年）

page ページ

その功業を敬慕してゐるジョージ・ワシントンの傳記を藏することを知り、その借覽を請うたところが、幸に、その人は、快く貸してくれた。リンカーンは、鬼の首でも取つた心地で、雀躍して、家にかへり、丁寧に、戸棚の中に入れて置いたが、不幸にも、その夜、大風雨があつて、壁の隙間から吹き込んだ雨の爲に、その本が、さんざんになつたので、子供心にも心配して、その夜は、終夜眠られない。翌朝、とやかくと案じたが、正直に、次第を述べて、罪を謝する外はないと決心して、濡れ破れて、ページもわからぬ書を持つて、鄰家に行き、泣

いてわびをし、そのかはりに、二日でも三日でも、勞役をさせて下さい」と頼んだので、貸主も、その心を察して、別段に、これを尤めず、その意に任せた。そこで、彼は、ワシントン傳を携へて、家に歸り、濡れたページを、丁寧^に乾して、晝夜の別なく耽讀した。以來、讀過數十遍、この大人物の品性に感化せられて、遂には、これを體得するに至つた。

かはや(廁)

又、彼が、一農家の僕となつて居た頃、或日、一人の旅客が、その家に宿つたことがある。その旅客が、深更に、廁に行つて、ふと見ると、庭の木立を洩れて、燈火の光

をはる(終)

がさしてゐる。不思議なことと、竊に行つて見れば、思ひがけなくも、裏の粗末な長屋に、一人の少年が、一心不亂に、讀書をして居る。旅客は、この意外の光景に、ひどく驚いたが、その夜は、そのまま、わが室にかへり、翌朝、主人に、この事を聞いた所が、主人も、彼は、感心を少年で、晝間は、畑に出て、寸暇を得れば、書を讀み、夜も、夜業が終れば、更くるまで勉強し、わからぬ事があれば、人に質し、學問を、この上なき樂としてゐる。しかも、温順で、謙遜で、正直に、よく働いて、才智もあれば、情愛もある。實に、末頼しい少年であると、答へたといふこと

である。この少年こそ、言ふまでもなく、リンカーンその人であつた。

艱難、汝を玉にす。リンカーンが、他日、大統領となり、世界の大人物として、萬人に仰がるるやうになつたのも、實に、この少年時代に、貧窮の經驗から得た教訓の賜であると思はれる。(アブラハム、リンカーンに據る)

二〇、倫敦の汽車

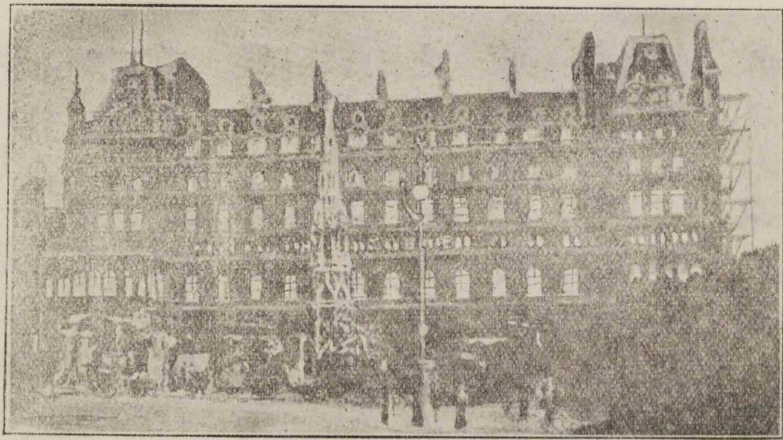
拜啓。先日、所用ありて、倫敦の或停車場より汽車にて、某地に赴き候。

London 倫敦
英國の首府

例によりて、三等の切符を求め、然るべき客車もがなと捜しまはり候に、生憎、どの客車も満員にて、辛くも、喫煙室に、一空席を見つけて、腰を下し候へば、今まで、新聞を讀み居たる、鄰の乗客が、急に、居ずまひを正して、席を譲りくれ候に、有難うといふ言葉、我知らず出で來り候。

車掌參りて、切符に、缺を入れ、顔を見て、莞爾と笑ひながら、ここは込み合ひますから、といひ出し候故、さては、懷中物御用心とくるかと思ひ居り候へば、鄰の室に御移り下さいと申し候。喜びて、

まゐり(參)



倫敦リヤンリーヴンストップ車場

隣室に行けば、品好き夫婦が、一組居るばかりにて候。小生は、英國式に、一寸、帽子を取つて、御免下さいといひながら、その側に、席を占めんとして、その二等室なるに心付き、驚きて、車掌に、注意致し候へば、車掌は、自分の帽子の徽章に、軽く、食指をあてながら、私が承知

さふらふ
(候)

して居りますと申し候。有り難うの語は、またもや、思はず、口を出て申し候。車掌が、その職權内の全力を盡して、この遠人を、優遇致してくれたるにて候。

倫敦に参りし當座は、汽車は、一等に限るものと心得居り候ひしが、或日、圖らず、地下鐵道の三等客車に乗り候ひし處、乗客の數が、少し多きのみにて、車内の設備も、裝飾も、一等と違はず、堂堂たる紳士も、平氣にて乗り居り候故、それ以來、汽車は、必ず三等と定め申し候。三等客車と申しても、

チエツク
Cheok

不作法なる風體の者もなければ、人の迷惑も構はず、われ面白げに、高聲にて笑ひ騒ぐ者もこれ無く候。車の出入にも、おし合はず、込み合はず、偶過つて、人の足、腕などに觸るれば、必ず、御免なさいとわび、窓を開くにも、戸を閉づるにも、同室の客に斷り、新しき乗客は、大抵、帽子を取るか、手を舉ぐるかして、先客に默禮し、出づる時も、多くは、「左様なら」と挨拶して出で行き候。又、小荷物を預け候に、チエツクも、何もくれず候へども、一向、間違もこれなく候。かやうなることは、英國にして、

ペンギン
Penguin

みじかい
(短)

始めて行はるべきことにて、到底、他國にては眞似がたき事かと存じ候。(杉村楚人冠の文による)

二一、ペンギン

凡、天下にペンギンほど、滑稽なものはあるまい。ぎよろりとした目玉を光らせて、人間のやうに、兩脚で、よちよちと立つて歩く。背中には黒、腹には白の綿毛が、一めん^みに生えて、兩の翼が、短く垂れてゐる。翼といつても、短いから、飛ぶ譯には行かぬ。唯、これで一つには、身體の調子を取り、一つには、武器として、敵と戦ふ。

チヨツキ
の靴

Necktie
ネクタイ

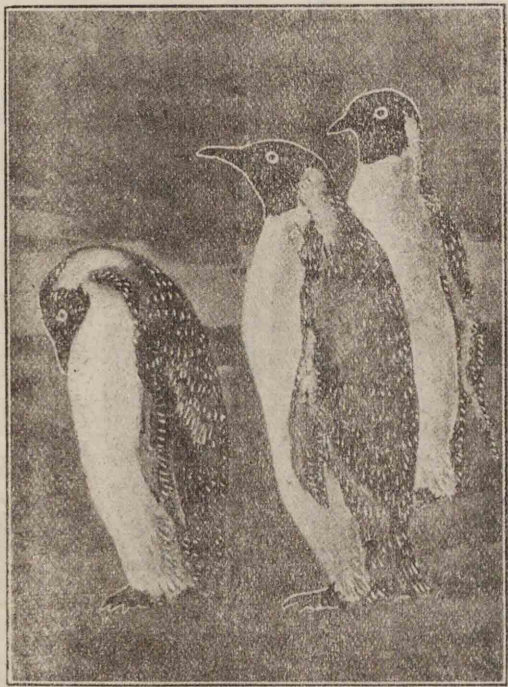
見たところは、さながら、小作な人が、黒の燕尾服に、白のチヨツキ、白のズボンで、両手を振つて歩くやうだ。或種のペンギンは、丁度襟の所に、黒い線があるので、まるで、黒のネクタイを締めたやうにも見える。人間に似た所は、こればかりでない。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互に、お辭儀をするやうな體で、首を下げる。

又、この鳥は、大變な見え坊で、胸の白い處が、一寸でも泥で汚れてゐると、仲間どもが、例の顔を見合はせて、互に嘲り合ふ。こころも、頗る、人間に似てゐる。善悪

ともに、人間に似た所が、餘多いので、何だか、これを殺すには忍びなかつたと、或探検家も云つてゐる。

春先、南極圏へ移つて來て、然るべき所へ、銘銘、巢を作つてしまへば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢、團體を組んで、旅行に出かける。その出かける時は、一人の總指揮官があつて、一同は、その命に従つて、連れ立つて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十萬といふ、大變な數が、一所に集つて、巢をくふが、その間に、何等かの社會的制裁が行はれるものと見えて、餘甚しい喧嘩はしない。

ペンギンの種類は、色々あるが、その立つて歩くことは一つである。翼が小さくて、飛ぶことの出来ぬ者が、どうして、海などを渡つて来るかといふと、これは、泳いで来るのである。水では泳ぎ、陸



では歩く。所で、敵に追ひ掛けられたとか何とかで、大急に駆け出さうといふ時は、忽

シヤックルトン
Shackleton
英國の南極探検家。

ち、身を倒して、腹這になつて、一瀉千里の勢で、櫓の様に、氷の上を滑り走る。その早いことは、非常である。

ペンギンの、音楽を好むのは、有名な話で、シヤックルトンの探検隊が、南極に止つてゐた時、時々、蓄音機を、氷の上に持ち出して、やつて見せた。すると、ペンギンが、十羽二十羽と、追追に集つて来て、遠巻に取り圍んで、感心して聞いてゐたといふ。

何分、氷雪の外に、見る物のない處として、よくよく、無聊に苦しむものと見えて、何か變つた事があると、ペンギンども、随分、遠方まで見に来る。シヤックルトン

の一行が、自動車を動したり、冬營の小屋を建てたりしてゐるのが、ペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさに、熱心に見に來たといふ。

大勢づれのペンギンが、途中、人間か、犬かに出會つた時は、大變である。假に、彼方から、人間が來たと見ると、ペンギン一同、遠くで、はたと立ちどまる。まづ、一行中の雄が、一羽出て來て、恭しく、首を下げる。やや、伏目になつたまま、何やら、長長と、挨拶の言葉がある。不幸にして、人間には、唯カカガアと聞えるばかりである。挨拶の臺詞終つて後、初めて、首を上げて、

あふひく
(仰向)

今度は、すつと仰向いて、嘴で、大きな輪を、一つ畫いて、さて、ひよつと、人の顔を見る。お分りになりましたか」といふ風だ。

元より以て、お分りになるべき筈のものではない。人間は、ぼかんとして立つたままだ。ここに於いて、ペンギンは、此奴分らぬなと見て取つて、今一度、前の挨拶を、長長と繰り返す。それでも分らぬと見たら、今度は、他のペンギン共が、がやがや云つて、承知しない。其處で、前に、挨拶に出た奴は、大いに面目を失つて、引き下る。すると、今度は、別の雄鳥が出て來て、又、前と同じ

カカカガアガアをやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長臺詞も、面白半分、我慢して、聞いてやるが、これが犬でもあつたら、それこそ騒だ。シヤツクルトンの探檢記の中にある話だが、或時、ペンギンども、右の順序で、犬に、挨拶をしたが、元より、犬に分らう筈はない。そこで、ペンギンが、腹を立てて、三羽一時に、例のカカカガアガアをやり出した。犬は面喰つて、わんわんと吠える。他のペンギンは、きよとんとして、呆れて見てゐる。これを見てゐた人間は、いづれも、腹を抱へぬはなかつたといふ。最後に

斷つておくが、ペンギンは、南半球特有の動物であつて、最も多くゐるのは、南極圈内、及び、その附近である。
(杉村楚人冠一へちまのかは)

第二巻より 二二、富士山その一

御殿場
駿河國駿東郡

八月二十四日午前零時、富士山に登らんとて、御殿場を發す。月は、いま、足柄山の頂を離れて、三尺ばかり、天に上れり。その明なること、恰も、晝の如し。

抑、富士山は、四面かけ拂の山にて、摺鉢を伏せたる形したれば、いづれの方面にも、登山口あり。東は須走

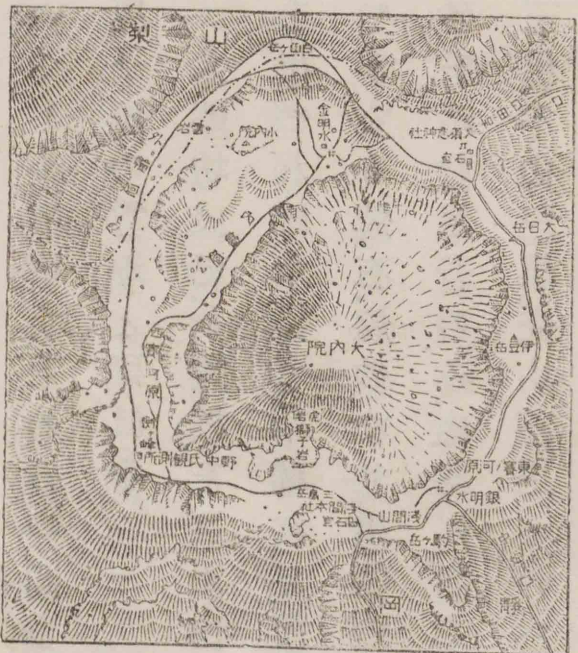
及び中畑に、南は須山に、西は大宮にありて、皆駿河に屬し、北は吉田にありて、甲斐に屬せり。山の腰より頂上までを、十合に分つ。一合の距離は、路の難易によりて、長短定らず。合の界に、石室を設けて、登山者の休泊所となせり。今、わが登らんとするは中畑口なり。

玉蜀黍や、芋の葉の影の、長く、短くうつれる畑道を、行き過ぐれば、爪先あがりの草原なり。山百合、女郎花、撫子など咲きみだれ、露きらきらと光りて、無数の玉を飾り、蟲の聲繁くして、雨に似たり。

行くに隨ひて、はじめは仰ぎ見し足柄、箱根の連山

をみなへし
(女郎花)

箱根
相模國足柄下
郡
愛鷹
駿河國駿東郡



馬返までは、尙、山の麓にて、いはゆる裾野なり。ここ

も、愛鷹の諸峯も、次第に低くなりて、岡の如く、堤の如く、はては、平地の如し。只、富士山のみ、夜霧の奥に、巍然として聳え、我を喜び迎ふるものの如し。

風、甚だ寒し。午前二時頃ならん、瀧川原の一軒茶屋に立ち寄りて、盛に、火を焚きて、煖を取る。

より先は、路嶮しければ、馬も利かずとて、この名あり。いつしか、樅、檜などの林の間をゆく。月影、梢を洩れて、鹿子斑の雪かと疑はる。

つゝ(杖)

太郎坊にて、金剛杖を買ふ。白木にて、長さ五尺。ここを出づれば、木盡き、草稀に、見渡すかぎり、コークスのやうなる焼石、焼砂なり。生物の聲、全く絶えて、只、わが、砂を踏む足音のみ、虚空に、高く響く。この山、俗に、草山三里、木山三里、禿山三里といへるが、木山の、五合目まで續けるは、吉田口に限り、他は、大概、二三合目までなりと聞く。

うるぼす

(沾)

寶永山
寶永四年十一月噴出す。高さ二七〇〇米突。

一合目に到れる頃、夜は、頂上より明けそめて、次第に、麓の方に及べり。折折、眞白なる水氣襲ひ來りて、衣を沾すは、雲の過ぎたるなり。三合目にて、須山口の路と合す。寶永山は、六合目の左に、敬ちて、その噴出坑と相對せり。忽ち、白鷺の點點として、下方、遙に動くを見る。近づけば、みな、白衣の富士道者なり。六根清淨と唱へつつ、步調緩に上りゆく。山に酔ひたるならん、途にうち倒れて、苦めるを、同行の人の、頻に介抱するも見ゆ。すべて、六七合目以上は、空氣稀薄なれば、人の呼吸數は、下界の二倍となり、火氣も、亦弱くして、飯を焚く

八峯

劍峯、馬背嶽、
雷電嶽、釋迦

に、よく熟せず。糯米を加へて、纔に粘力を添ふとぞ。
頂上を仰げば、山は、殆ど落ちかからんばかりに聳
え立ちて、一步は、一步より峻し。谷めきたる凹みに、雪
あり。潔うして、碎けたる銀の如し。勇氣を鼓して、掘り
て、これを嚙む。齒牙に徹りてつめたし。八合目よりは、
いはゆる胸突八丁にて、岩石の間に、路なき路を求め
て上るなれば、胸を突くはおろか、ようせずば、岩にて、
額を撲つべく、衣を裂くべし。路の窮りたる處に、梯子、
二つかかれり。午後一時、遂に、頂上に達す。

頂上には、八峯環りて立てり。劍が峯、最も高し。ここ

嶽、藥師嶽、經
嶽、駒嶽、觀
音嶽

に、氣象觀測所あり。八峯の中間には、周回十五六町も
あらんと思はるる、一大噴火口の迹あり。昔は、ここに、
水ありて、池を成したりきとか。噴火口の外部を巡る
を、御鉢めぐりと稱す。その途中、北に金明水、南に銀明
水の二泉ありて、盛夏も涸るることなし。又、東に、缺間
ありて、蒸氣を噴出す。地に、手をあてて試みるに熱し。
三十分にて、鶏卵を蒸し、酒を爛すべし。

二三、富士山その二

今や、天に近づくこと一萬三千尺。杖を、岩頭に立て

山中、河口
甲斐國都留郡
本栖
同國西八代郡
富士川
日本三急流の
一、富士山の
西を流る。
三保の松原
駿河國安倍郡

て、長く嘯けば、風起つて、雲の飛ぶこと頻なり。足柄箱根の山は、蟻垤の如く、山中、河口、本栖の諸湖は、杯水の如し。銀の針と見ゆるは富士川か、青き絲とみゆるは三保の松原か。駿河の海、相模の灘は、二つの鏡を並べたるが如くに光り、末は、天と一つになれり。試に、掌を開いて掩へば、山も水も、皆、わが手中に藏る。忽ち、わが對へる空中に、富士山の影現れたり。裾は、山に互り、水を越えて、數州をおほひ、色は紫紺にして、優美鮮麗なること、喩へんに、物なし。これを、御影と稱す。朝日には西に、夕日には東に現る。

木花開耶姫
瓊瓊杵尊の妃
大山祇命の
女。



富士山の頂上

木花開耶姫を祀れる、淺間の本社を拜す。神官に乞ひて、杖には烙印、扇子、葉書などには朱印を捺す。

薄暮、社前なる石室に宿る。屋根の高さ九尺ばかり、太き木を骨組とし、岩に倚りて、石を疊みて造れり。廣さは、二十疊もあるべし。あらき板敷の中央に、爐を切りたり。醴酒を名物とし、三國一と稱す。携へたる布子を著、蒲團、二三枚重ねて寝ねたるが、寒氣強

こほり(氷)

くして、目も合はず。未明に起きて、戸外に出づれば、風は、錐のやうに、膚を刺し、使ひ棄てたる水は、片端より氷りて、つららとなれり。乃ち、立ち戻りて、蒲團を、身に纏ひて出で、岩の上に踞して、日出を待つ。

天は、清く晴れたれども、脚下は、薄黒き雲の波、一面にはびこれり。その雲、綿の如し。見る見る、東の方、はつとあかく、紫となり、薄紅となり、遂に、深紅色となる。さて瞬くひまに、朱盆の如き日はさし昇りぬ。忽にして、百千筋の金光、きらきらとして、八方に散じ、天地、全く明なり。

降路は、須走口を取れり。六合目より、太郎坊までの間、砂のうへを滑走して下るを、走と稱す。一度躍れば、杖も足も、止るところを知らず。只、風の、耳朵に觸るる聲を聞くのみ。この間に、草鞋を破ること四足。木山を過ぎ、裾野を通りて、須走に著きたるは、二十五日の午前九時なり。登るには、十餘時間を費ししもの、降るには、僅に二三時間。快なること甚し。

裾野の月、頂上の日出、御影、これを、富士山の三大壯觀とす。我は、いま一舉して、これを併せ見ることを得たり。富士の山神の、我を愛して、この、稀なる幸を與へ

給ひしにやあらん。(金子元臣)

二四、夏の興

一、月見草

路は多摩川を遠ざかりて、連亙せる小山に接す。上には、松林あり、檜林あり。百合も見ゆ。多摩川より引ける用水、ゆるく流れ、水を蔽へる合歡木の花、傾ける日に映じて、あざやかなり。武藏野も、ここにいたりて、一種の景致を見る。登戸のぼりと二子ふたことの中央とおぼしき處に、新渡と稱する渡あり。

多摩川

甲斐に發源し、武藏に入り、荏原郡羽田村に至りて海に入る。

登戸、二子

共に武藏國橋樹郡にあり。

磧には、川原撫子、花をひらけり。月見草も多し。一本の月見草を、根ながら掘り取り、巻煙草の袋の殻に、砂と共に、根を入れて持ち來る。ここより家までは、四里もあるべし。日は暮れかかりぬ。囊中、僅に十錢をあますのみ。煙草盡きたれど、買ふに由なし。

青山

東京市赤坂區

登戸街道に出でて、青山の方に向ふ。暮靄、林を罩めて、蝸の聲聞えはじめ。空は、白雲漠漠たるに、日光映じて、微紅を帶ぶ。地の陰氣になりゆくに引きかへて、空は、花やかになりゆく。十日頃の月にやあらん、雲端に見えつ隠れつして、ますますおもしろし。路、用水と交

又するところより左折すれば、農家の火、點點、林間に見えそめて、既に夜なり。雲は、いつの間にか散じけん、半輪の月、空にあざやかなり。ふと、手にせる月見草を見れば、いとしや、蒼は開いて、花となりぬ。(天町桂月)

二、涼しき夕

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつつ釣る。前には、殘照の映れる川あり。後には、さやさやとそよぐ青蘆あり。

潮、次第に満ち、川、さかしまに流れぬ。水澄みて、水なきが如く、水底、地よりも鮮なり。今年うまれの黒鯛、隊をなして遊げば、その影、ちらちらと、底に印せり。蟹をあげて迫りくる辨慶蟹におどろきて、小鰻は、杭を抱きて這ひ登り、石垣に縋れる宿かりは、身を投ぐるやうに、ころころと、水底におちゆく。

下流の方を望めば、下流、却つて、上流の如く、水は、山影、碧深く落つる邊より、涼風と共に流れ來る。潮満ち盛れば、殘照の影、ややもすれば押し流されんとし、甍甍たる川底の藻も、水に梳られて、うねうねすれば、幾隊の魚苗はとどまりかねて、流れゆく。

垂れたる足の爪先に、水とどく頃は、殘照消え、潮も

しほ(潮)

満ちて淀みぬ。鯨跳つて、また水に落つる音、石を投ぐるに似たり。(徳富蘆花―自然と人生)

三、釣瓶の水

或夜、頭熱して眠られず、起きて、庭を歩むに、樹梢を漏り來る月の光碧にして、蟲聲、雨の如く、四方に聞ゆ。ゆきて、井戸端に至り、繩を手繰れば、月、ゆらゆらと、釣瓶の水にあり。口づから、月光を吸ひて、あまる水を覆せば、月影、たらたらと滴り落つ。あまり美しきに、また一釣瓶、なほ一釣瓶、三釣瓶の水をこぼして、尙しばし、蟲聲、樹影の中に立ちぬ。(徳富蘆花―自然と人生)

France フランス
ベルナルド
バリッシー
(二二七〇
年―二二四
七年)
Bernard Palisy
Glass ガラス

二五、陶工の苦心

昔、フランス國に、ベルナルド、バリッシーといふ人ありけり。その父母、甚だ貧しかりければ、更に、學校の教育を受けたることなかりき。長じて、ガラスに忍がき、また、土地を測量することを業としけれども、妻子ある身の、これを以て、生計を立つるには足らざりけり。

當時、フランスの陶器は粗惡にして、その釉藥栗色なりき。彼は、これを改良せんと思ふこと久しかりし

が、一日イタリヤの、ある名工の製せる磁器を見て、心益、これに傾けり。然れども、妻子あるが爲に、自ら、イタリヤに往きて、その祕を探ることを得ざりければ、自己の考を以て、種種の藥品を求め、白色の釉薬と、彩色の薬とを探り出さんことを努めたり。誠に、これ、暗夜に、物を覓めんとする類にして、あはれにも、また大膽なる事なりけり。

かくて、彼は、窯を築き、土器を買ひ、種種の藥品を塗りて、焼き試みることに、多年に及びたれども、試験、一も中らず。さらぬだに、生計豊ならざるを、今は、試験の費

用に追はれて、貧困、すでに迫れり。されば、自ら、試験の資料を買ふこと能はず。懇意なるガラス工、又は、瓦工の窯の一隅を借りて、小試験をなすこと、また多年にして、一も成らず。

彼は、これが爲に、毫も、心を屈せず。遂に、一の大試験をなさんとして、あるかぎりの錢財をつくして、三百餘箇の土器を求め、薬を塗りて、ガラスの窯に焼くこと數時間にして、出し視るに、白色の釉薬焼け著きたるもの、唯一箇あり。

彼は、既に、成功の緒を得たりと思ひければ、みづか

ら、瓦石を積みて、家の傍に、窯を築きけるが、七八箇月にして、漸く成れり。さて、彼は、下地の土器を製造し、更に、藥料を塗りて、早朝、これを、窯の中に入れ、火を焚きて、日暮に至りたれど、藥、いまだ焼け著かず。遂に、再び、旭の光を見るに至れり。されど、彼は、端然として、尙、窯の前を去らず。その妻、僅ばかりの朝飯を持ち來て與へけるが、彼は、これを食ひつつ、うち守りてあるほどに、その日も、亦、空しく暮れぬ。かくすること七晝夜にして、遂に成らず。彼は、面くすぼり、身體疲れ、更に、この世の人とも見えざりけり。

まへ(前)

彼は、これを事ともせず。こは藥料の、なほ宜しきに適はざるが爲ならんとて、更に、工夫を凝して、試験せんとしけれども、費用、すでに盡きければ、友人の助力を乞ひ、辛うじて、物品を調べ、やがて、復、窯に、火を點せり。かくて、藥料の焼け著かざる前に、薪、はや盡きなるとす。彼は、機を失はじとて、板屏をうち毀ちては投げ入れ、投げ入れしけり。板屏、すでに盡きたるに、藥は、いまだ著かず。

彼は、なほ十分間、火力を保たせんとて、家なる椅子を持ち出でて、投げ入れぬ。また何をかと看まはすに、

寢臺の外には、一物も無かりければ、これをも打ち砕きぬ。今よりは、一家の者、いづこに寝ね、いづこに眠らん。妻子は、そのありさまを見て、發狂せしなりと思ひ、泣き號ひて、逃げ走れり。然れども、この最後の火力により、白色の釉薬、始めて焼け著きたり。彼の喜、それいかにぞや。

然れども、この時は、唯焼き著け得たりといふまでにて、賣品とする程の陶器には、あらざりき。されば、彼は、尙、許多の試験を要すれども、今は、才覺、すでに盡きて、如何ともしがたき苦境に陥りぬ。ここに、酒屋の主

人あり。彼が不撓の志に感じ、その家に食客たることを許しぬ。彼は、これがために、纔に、生命を繋ぐことを得て、毎日、試験に従事すること半年なりしが、またもや失敗せり。

彼、自ら、この時のことを語りていはく、余は、いかなる失敗にも堪へ、いかなる艱難をも意とせざりしが、唯堪へ難かりしは、家人の詬罵なりきと。誠に、出でては、近鄰に笑はれ、入りては、家族に侮蔑せられ、蓬髮、徒跣、悄然として、窯の前に立たざるべからざる運命に陥れる。彼が心のうちは、そもいかなりけん。

古人
宋の大儒朱熹(一七九〇年—一八六〇年)

古人いはく、精神一到何事不成と。パリッシー、經驗を積むこと十八年、遂に、精良無比の陶器を造るを得たり。しかのみならず、描くところの草木、鳥獸までも、一一寫生して、工夫しければ、その巧妙、また比類なく、その名、世界に高くなりぬ。前年、ロンドンにおいて賣物に出でしその皿は、徑一尺餘にして、價わが一千六百圓に當れりといふ。また以て、その貴きを知るに足らん。(中村正直「西國立志篇」による)

二六、忠義の犬その一

物部守屋
尾興の子。大連。(一一二四七年)

蘇我馬子
稻目の子。大臣。(一一二八六年)

茅渟縣の有眞香邑
今の和泉國泉南郡の内。

物部守屋の家臣に、捕鳥部萬といふ忠義者が居つた。蘇我馬子が、守屋を攻めた時、萬は、手兵一百人を率ゐて、守屋の難波の邸宅を守護して居たが、主人戰死の報を聞いて、大いに失望し、夜に乗じて、潛に遁れ、故郷茅渟縣の有眞香邑の山中に匿れた。間もなく、このことが、朝廷に知れたので、忽ち、討伐の衛士を遣された。

折から、萬は、身に、弊衣を纏ひ、弓を持ち、劍を帯びて、山の中から出て來た。それを見た數百人の衛士は、立所に、これを包圍しようとした。萬は、さながら、猿のや

うに、身を躍らせて、竹藪の中にかくれ、忽の間に、數人の衛士を射殺したので、討手の面面は恐れ惑うて、容易に近づくことは出来なかつた。

勇敢な萬は、機會はよしと、竹藪の中から驅け出したので、それ遁すなと、衛士等が、一時に射かけた矢の一つが、萬の膝に中つた。萬は、その矢を抜き取つて射返したが、何しろ、膝を射られたので、地に倒れながら、大音あげて、

たよる(倒)

「汝等、よく聞け。萬は天皇の御楯たてとなつて、勇を示さうとしたのである。それに、汝等は、その理由も問は

ずに、吾を苦めるとは何事である。さあ、吾に罪があると思つたら、立派に、進んで、その譯をいへ。

とよばはつた。衛士等は競うて、萬を射た。矢は、宛然、雨のやうに、四方八面から、萬の體に集つてくる。萬は、巧たくまに拂ひのけながら、三十餘人の敵を射殺したが、敵は數百人、此方はたつた一人、しかも、身には、重傷を負うたのだから、最早、如何ともしやうがない。

さすがの萬も、今はこれまでと思つたか、劍をもつて、弓を、三つに截り、また、その劍をば、力に任せて、くの字形くのかたちに屈げて、傍に投げ棄て、短刀を引き抜き、われと、

わが首を貫いて、實に花花しい死様をした。
河内の國司から、この趣を奏聞すると、朝廷からは、
直に、萬の死骸を、八段に斬り、八箇所に分つて梟せし
めた。

二七、忠義の犬その二

ここに、萬が、永年飼ひ馴して置いた、一匹の白犬が
あつた。萬は、この犬を、わが子のやうに可愛がつて、育
てて居たので、犬も、主人の恩に感じて、日夜、忠實に働
いて居つたが、主人が討死したばかりか、死骸は殘酷

ほえ(吠)

にも、八裂にされて、方方に梟せられたので、白犬は、畜
生ながらも、このあさましい有様を見て、無念、骨髓に
徹したもののか、夜も晝も、悲鳴をあげて、その場を吠え
廻り、或時は、天を仰いで泣き、或時は、地に伏して泣き、
胸の苦を、天地に訴へようとすする有様は、人間の情と、
少しの變もない。

かうして、白犬は、數日の間、主人の死骸の傍を去ら
なかつたが、或時、番人の隙を窺つて、その首を啣へ出
して、程近き古冢に隠し、自分も、一所に、その側に臥し
て、生きた人に仕へるやうな様子をして居たが、元よ

うゑじに
(飢死)

り飲まず、食はずに居たから、遂に、五六日の後には、飢死してしまつた。

國司の方では、大切の萬の首級がなくなつたので、これは一大事であると、方方探索した結果、右の次第が解つたので、皆皆、舌を卷いて、さてさて感心な犬である。萬物の靈長と誇つてゐる人間も、これを見ては、恥しい次第である。ありのままを、朝廷へ奏聞したが、よからうといふので、白犬の忠死のことを、詳しく奏聞すると、朝廷からは、直に、命令が下つて、

「萬が犬の行は、世にも、稀に聞く所である。後の爲に

もなる事ゆゑ、萬が遺族に命じて、墓を造らせ、厚く、葬儀を営ませよ。

と仰せ下され、萬が死骸諸共に、白犬の死骸をも下げ渡されたので、萬の遺族は、今更のやうに、白犬の忠死を感じ、有眞香邑に、萬と犬とを葬り、見事な墓標を立てて、後世に傳へたといふことである。(萩野由之―讀史の趣味による)

二八、やまと心

頼山陽

花よりあくる。三よ一野の。
 はるはあけぼの。見わさせば、
 しろくく人も。こま人も。
 大和がとろに。たすねべし。

熊澤蕃山

雲のわくるを。月のくまを。
 風のちらほら。花乃ため。
 雲と風とあ。あやそくを。
 月と花とは。たふとけし。

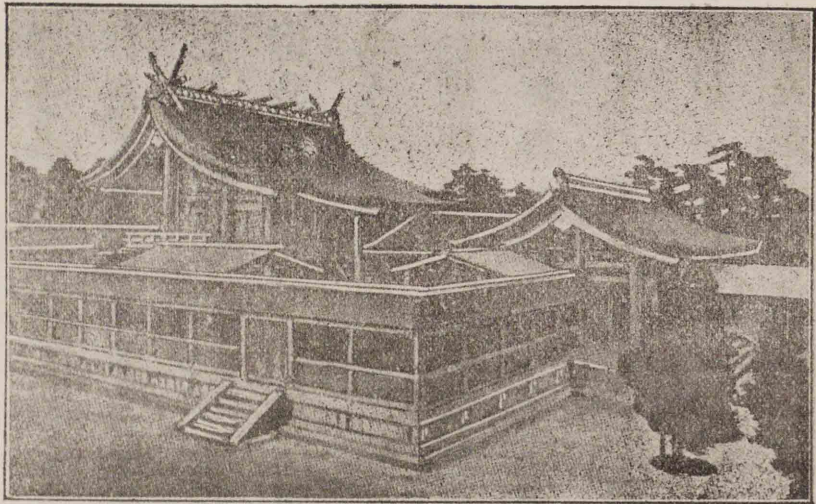
先月
大正二年一月

二九、明治天皇の御遺物を拜すその一

先月十七日、宮中より、地方長官一同に、午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、例刻に、参内致しましたところが、十一時すぎ、権殿参拜を許されました。権殿と申すは、崩御の後、一年間、皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私共は、この度、先帝の皇靈を拜する、特別の御恩典に預つたのでございます。そこで、私共は、長く広い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く、権殿に詣つて、一人づつ、最敬禮を致しました。蓋し、その瞬間は、何人と雖も、一種の靈感に打たれない

ものはなかつたでございませう。その權殿と申すは、平素、皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、これに充てさせられたのでございます。

それから更に、奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は、表御座所とも申し上げ、萬機の政を、御親裁遊ばされる處でございます。先帝には、長く、茲に在らせられて、徳教を御敷きになり、大憲を御定になり、或は、國交を御修め遊ばされ、時に、或は、鷹の師を起させられる等、宏謨雄圖、一に、この中で御定め遊ばされたのでございます。然らば、どんなに御



明治神宮御本殿

立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常、私どもが參内の節、休息を許される御部屋の方が、却つて、遙に御立派である。しかも、あまり廣くない、二間續の御部屋であつて、瀟洒たる、檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も、御

椅子も、實に御質素なもので、絨毯の如きは、當初敷かれたままのもの故、後には、色も、大分褪めて参りましたが、たので、侍臣から、御取換のことを、屢願ひ出しましたが、御許がなくて、竟に、今日に至つたのださうでございます。

御部屋は、三方、壁を以てめぐらし、南の一方に、硝子戸があり、御机は、御座所の中央に、南向に御据ゑになつてございます。この御構造を拜觀すると同時に夏分は、さぞ御暑い事でいらつしやつたらうと感じましたが、先帝には、御暑さの御厭もなく、連日、此處に出

御あらせられたのでございます。これにつけても、

年年に、思ひやれども、山水を、

汲みて遊ばん、夏なかりけり。

の御製を思ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。のみならず、この御部屋には、ストーブの御設がございますけれども、三十七年の冬以來、御もちゐるがない。竊に承るに、その年の冬の或朝、例の如く、ストーブに、火を焚いてございましたが、先帝出御遊ばすや否や、火を消せと仰せられる。侍従は、何故か分りませんが、唯、仰のままに、火を消しました。さて、その後と申すも

ストーブ
Stove

のは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を、御許し遊ばされなかつたとのことでございます。勿論、大御心のほどを伺ひ奉るわけには参りませんが、侍従方の推測し奉る所によれば、當時、皇軍が、滿洲の野に、大敵と戦ひ、飢寒に苦しんでゐるのに、御同情を垂れさせられ、兵士と、艱難を共にせんとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は、唯、一箇の、小さい丸火鉢のみを、御使用遊ばされたとの御事。今、その御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやられ

たる御製、

桐火桶、かきなでながら、思ふかな、

すきまおほかる、しづが伏屋を。

でございます。

三〇、明治天皇の御遺物を拜すその二

この御部屋の拜觀が終つて、更に、別室の拜觀を許されました。この御部屋には、先帝の御學問所において、御使用になつた御遺物全部、そのままに据ゑ置かれてございます。これは、今上天皇陛下の大御心に出

でさせられたる趣に、拜承致しました。構造も、方向も、廣さも、御學問所と、全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日、即ち、先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。床の間には、その當時の御軸物が掛けてあり、その前方には、御劔數振横たはり、御机は、中央に、南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が、御机に接近することなどは、思ひも寄らぬことでございますが、今回は、特に、御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

テーブル

まづ、御机は、羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に、

elbaT

焼痕がございます。これは、先帝が、御煙草を召し上つていらつしやつた節、臣下より、政務を言上致しました處、先帝には、御吸ひかけの御煙草を、テーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて、この焼痕がつくやうになつたのだと申すことでございます。さて、この焼焦のある、テーブルの羅紗を御取り換へ申し上げんがため、侍臣より、幾度となく願ひ出ましたけれども、斷じて、御許がなかつたとの御事。蓋し、何物でも、それにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる、御儉徳の至と拜察し

奉ります。

御硯箱は、明治二十年に、鹿兒島縣から、御取寄になつた、竹製の品でございます。そのなかの筆は、普通の御品で、我等臣下の、日常用ゐる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに、御使ひふるしになり、墨も、亦同様で、一寸位に磨りへらされた品でございます。鉄も、亦同じく、普通市場にある品で、その傍に、學校生徒等の用ゐる、普通のインキがございました。最初は、侍従の方が、何かの調に用ゐた儘、其處に置き忘れたのであらうと存じましたが、

やはり、先帝の、日常御もちゐになつたものだと承つて、今更ながら、御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて、慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に、獅子の毛皮が敷かれてございます。これは、青山御所において遊ばされた頃から、久しく御使用になつたもので、毛も、次第に磨りきれ、皮も、遂に破れるやうになりました。そこで、臣下より、御取り換を願ひ出しましたが、なに、これでよいとて、御許がな

かは(皮)

し、適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮

でもよいとの思し召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍従が、この邊が犬の皮です。」と説明して居られました。

ホワイトシャツ
Board ボール

その傍に、ホワイトシャツを入れる、白いボール箱やりのものが、澤山に積み重ねてございましたから、「何に遊ばす物か」と、侍従に尋ねました處、やはり、シャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとして、御手許に留め置かせられた物であるとのこととて、ございました。

大臣方より上奏、御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ

て、表に、主務者の名を署して、上るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして、御不用になつた、前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を御認めになる、御詠草に御用ゐになりました。それを、御側の方が、別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に、天下の物は、用ゐるに、その途を以てすれば、一として、無用の物はない。先帝は、かく、萬機の政を聞き召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が、皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀、及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約に相成り、些にても、冗費をば御省き遊ばしたと申すこととてございます。一天萬乘の大君におはしましなから、禿びたる御筆を御用ゐになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか、皆、これ節すべきを節して、有用の事にのみ御用ゐる遊ばさうといふ、大御心に外ならぬことと存じます。

さて、御次の間には、造花や、彫刻や、種々な物品が備

へられてございました。これを拜見いたしまするに、學校や、展覽會等に行幸の節、御獎勵の爲御もちかへり、又は、御買上にならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも、格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてて、殆ど、裝飾の用を爲さぬものまで、その儘になつてございます。その他、美術工藝品の如きも、皆、御獎勵のため、俗人の道樂とは、全く、趣を異にしていらせられませぬ。

御製に、

千よろづの民と偕にも、樂しむに、

ますたのしみは、あらじとぞ思ふ。

とございませが、實に、このやうな御樂を求めさせられんが爲、先帝には、長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございませ。

今や、我が國運は、先帝の、長き御心づくしの御蔭を以て、隆隆として興り、我等は、世界の一等國民となりました。顧みれば、我等は、長い間、聖天子御一人に、非常の御苦勞をお掛け申し上げましたのでございませ。ここに、御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國民の、ちからのかぎり、つくすこそ、

わが日の本の、かためなりけれ。

の御製をも、同時に服膺して、公人としても、私人としても、力のあるかぎりを盡し、以て、我が日の本のかためのため、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございませ。(笠井信一)

三一、加藤清正

加藤清正といへば、誰でも、武勇絶倫の豪傑であるといふことを知つて居る。この人は、豊臣秀吉の家來

加藤清正
肥後守と稱す
尾張の人。(二
二二一年―二
二七一年)

賤が嶽の七本槍
加藤清正、福島正則、片桐且元、加藤嘉明、糟屋武則、脇坂安治、平野長泰。
 朝鮮征伐
後陽成天皇の文祿年中、豊臣秀吉、朝鮮を伐てり。

で、賤が嶽の七本槍や、朝鮮征伐の勇將として、家庭の話題となつて居るし、又、一方には、清正公様と祀られて、多くの人の信仰する神様となつて居る。

しかし、この清正は、決して、武勇一遍の軍人であつたのではない、種種の點において、非常に敬服すべき武士である。例へば、築城の上において、清正が、名古屋城を築き、大阪城を築き、また、熊本城を築いたのは、有名な事實である。又、經濟の道に精しく、下下を、よく憫んだといふやうなことも、著しい事實である。茲に、私

清正が、肥後國熊本城に居た時、ある夜深に、急に、小姓を呼ばれたので、小姓が驚いて行つて見ると、清正

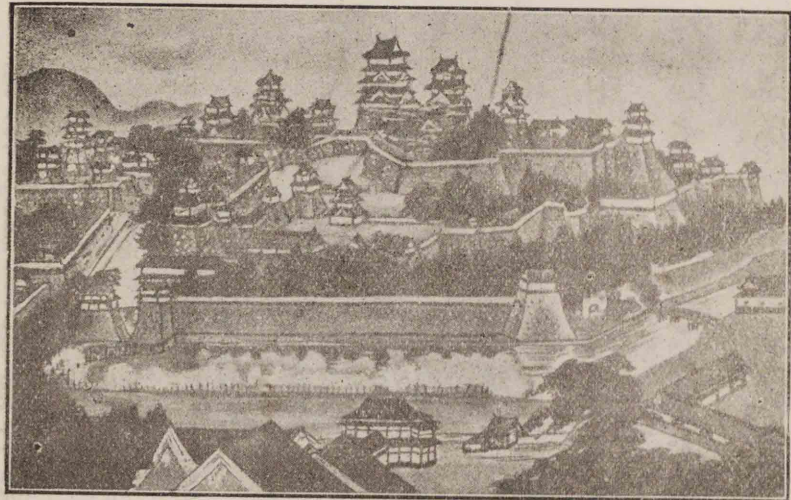
のいはれるには、

「今、急に思ひ出した事がある。速に、庄林隼人介を呼べ」とのことである。そこで、早速、庄林へ、使者をやると、時は、最早



加藤清正肖像

夜中過のことでもあり、且、庄林は、丁度、その時、風邪をひいて寝て居たのであつたが、主人からの使者だといふので、取るものも取り敢へず、頭髮なども亂れた



熊本城

ままで登城した。
 すると、清正は、
 「お前に来て貰つたのは
 別儀でない。お前の家來
 で、年の頃二十ばかりの
 若者に、いつも、茜の袖な
 しばかりを著て居る者
 がある、あれは、何といふ
 者か。」

と尋ねられた。庄林は、

「あれは、出來助と申しまして、尾張國の者でござい
 ます。實に、心掛のよい者で、只今では、草履取を致さ
 せてをります。が、はたらき者でございます。」

と、お答をすると、清正のいはれるには、

「されば、それぢやて。いつぞや、川尻に、芝居能があつ
 て、見物に行つた時、お前をも、供に連れて行つたが、
 ふと、あの草履取の出來助が小便するのを見たの
 に、肌には、鏈の帷子を著け、脚絆の代に、脛當をして
 居つた。今、世間が、漸く治つて、大抵の人は、平服を好
 み、兵具の用意などは、氣にも止めなくなつて行く

川尻
 熊本の南三里

世の中に、あの男の心懸は、眞に、下郎には珍しい。武の本意はここぢやと思ひつめた。今まで、種種の用に紛れて忘れて居たが、今、一寸思ひ出すと、これは、一刻も捨てて置かれぬ。どうかして、ああいふものに、褒美をやりたい。つらつら思ふのに、人の運命世の治亂、身の盛衰、天地の變は、何時かはるか分らぬものである。かういつてる中にも、おれが死ぬか、お前が死ぬか、但は、あの男が死ぬかして、一人缺けたら、この志は、無になるのである。それでは、甚だ残念だと思つたから、夜更ながら、お前を呼び寄せた

のである。どうか、早く歸つて、出來助に申しきかせ、よく取り立ててやつてくれ。しかし、朋輩の嫉もあるから、あまり高く用ゐることはよくない。お前も、病氣のところを大儀であつた。家内の者も心配して居ようから、早く歸るがよい。それでも、酒一つ飲んでゆけ。

と、手あつた言葉をたまはつた。庄林は、主人の、この言葉を聽いて、涙に咽せかへり、とかくの返答もそこそこ、あり難さが、肝に銘じたのであつたが、ややあつて、

「どうか、殿にも、早く御寝み遊ばされたりございま
す」と申し上げて、直に、家に歸つて來て、出來助を呼び
出して、清正の言葉を申し聽かせた上、六十石の近習
に取り立てた。出來助も、このあり難さが、骨髓に徹し
て、いよいよ、忠勤を勵み、後には、名高い武士になつた
といふことである。

この物語は、雨窓閑話に載つて居る事柄で、いかに、
清正が、自分の家來を思ひ、家來の家來までを思ひ、延
いては、廣く、人民一般を思つたかといふこと、及び、清
正の、軍事上の成功も、また、文治上の成績も、決して、偶

雨窓閑話
一卷。古今の
雑話を集めた
る隨筆。著者
詳ならず。

然でないことがわかるのである。又、清正の家來にな
つて居るものが、この慈悲、恩惠に富んで居る主人の
ために、いかに感泣し、いかに身命を抛つて、その値遇
に酬いようと謀つたかが、よく分るではないか。随つ
て、清正の事業は、どの點においても、確實に成功して
居て、三百年後の今日においても、なほ、世上から欣慕
せられるのである。（上田萬年「英雄史談」）

三二、人の一生

一 人の一生は、重荷を負うて、遠き道を行くがご

とし。急ぐべからず。

一 不自由を常と思へば、不足なし。心に、望おこらば、困窮したる時を思ひ出すべし。

一 堪忍は無事、長久の基。怒は敵とおもへ。

一 勝つことばかり知りて、負くることを知らざる時は、害その身に至る。



徳川家康肖像

一 おのれを責めて、人を責むるな。

一 及ばざるは、過ぎたるよりまされり。(徳川家康)

三三、笑話三則

一、タレス

希臘の哲學者タレス、或時、歩きながら、一心不亂に、天文を窺つて居た所、誤つて、眞逆様に、溝の中へ落ち込んだ。通りがかりの婆さん、この爲體を見て、天文の御研究は、至極結構だが、天上の人ならば、いざ知らず、地上に住居して居給ふ以上は、足元の御用心が肝心でございませう。(和田垣謙三「西遊スケッチ」)

Thales
タレス
希臘七賢人の一
前六四〇年
前五四六年

二、ラフォンテーヌの機智

寓話作者ラフォンテーヌは、毎朝、食事後、果物を食べる習慣であつた。或朝のこと、あとでと思つて、一箇の梨を、煖爐のかざり臺の上へ載せて置いて、一寸、書齋へ行つた。その中に、一人の友人が來訪したので、その室へ通した。彼が、書齋から出て、その室に來て見ると、件の梨が見えぬ。おや、誰か、梨を食べたのかしら。友人は、何食はぬ顔で、僕ではないよ。君でなくて幸だ。實は、鼠を退治しようと思つて、あの梨へ、亞砒酸を入れて置いたのだ。友人は驚いて、そりや大變だ。解毒劑は

ラフォンテーヌ
佛國の人。
(二二八一—
年—二三五
五年)

無いか。「安心したまへ。今のは、梨泥棒を見出す爲の策略なんだ。」(和田垣謙三—西遊スケッチ)

三、頓智で一命を拾ふ

或人、その奉侍する君主の逆鱗に觸れ、汝の罪、死に當る。覺悟せよ」といふ嚴命を蒙つた。その人は、顔を、地に擦り附けて、「どうぞ、命だけは御助け下さるやうに」と、歎願に及んだ。それは相ならぬ。しかし、死方は、汝の選擇に委す。如何なる方法で死にたきか、即答せよ。その人、畏る、畏る、頭を擧げて、昔に變らぬ御慈悲、あり難く存じます。願はくは、老病で死にたりございます。王

は失笑して、遂に、命を助けられた。(和田垣謙三「西遊スケッチ」)

三四、天の橋立

天、やや曇りたれど、橋立一覽の念勃勃として、とどめ難ければ、小舟を僦ひて、朝はやく、宮津の客舎を出でて、鏡の如くなる江上を、ゆらゆらと漕ぎ行く。舟は小なれど、苦をかけ、毛氈を布きなどして、火入まで備へたれば、乗ごこち、いとよし。濱邊に、櫂を立てて、網を干したる様の、恰も、晝の如くなる漁村を、左にながめつつ、漸く、松影の婆娑たる長洲に沿ひ、北に向ひてす

宮津
丹後國與謝郡

かい(櫂)

すむ。

舟子の語り出づる、さまざまの名所話に、耳を傾けつつゆく程に、やがて、籠神社の前に著きぬ。社前に、茶店あり。しばし、そこに憩ひて、下駄をば、藁草履にはき換へ、直に、成相山に登る。路は嶮しけれど、苦しきほどにもあらず。右にをれ、左に曲り、上り上りて、傘松の下に至り、首を回して望めば、眼前の好風景、まことに、日本三景の一たるに恥ぢず。與謝の江、與謝の海を劃れる白沙、青松は、恰も浮べるが如く、六里の翠色、遠く、萬頃の波光に映じたるさま、晝にも寫しがたく、筆にも

けはし(嶮)

しづ(賤)

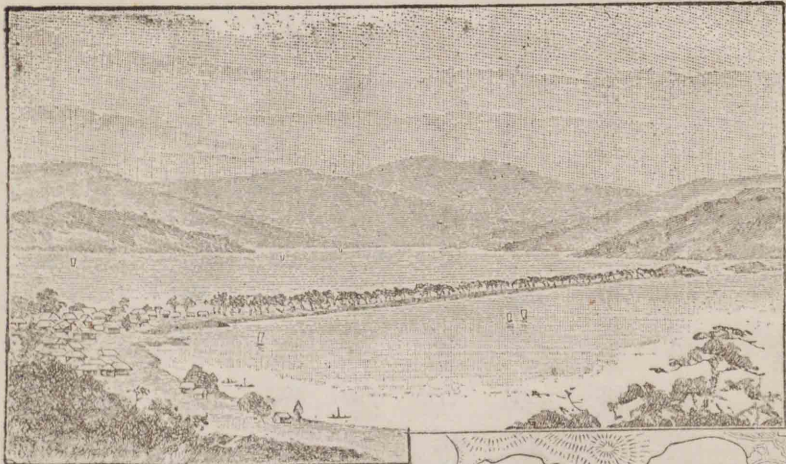
あらはし難し。岩瀧の村、芳野の山、九世の文珠堂は、ちかく、前にありて、黒崎の鼻は、とほく、左にあり。釣する海士の小舟、立ち騰る賤が屋の煙、いづれも、みな、詩趣ありて、面白きこといふべからず。

をかしさ

さて、天の橋立股眼鏡とかいひて、ここに登りて眺望するものは、皆、かくして見るといへば、われも、をかさを忍びて、全景に、背を向け、身をかがめ、頭を垂れて、股の間よりのぞき見れば、不思議や、今まで淡く見えける景色、俄に、油畫の如く、パノラマの如くなりて、水のさま、山のすがた、ひとしほ、その趣を添へ、水中に、

Panorama パノラマ

にし(虹)



天あるか、また、天上に、水あるかと疑はれ、長橋の、その間に架せるありさま、實に、大空に立てる虹ともいふべく、また、海中に漂へる浮島ともいふべきなり。

成相山より下りて、ひとり、天橋の松の間を歩みて、橋立明神

智恩寺
臨濟宗。

の所より復、舟に上りぬ。この松樹は、丈の長短不揃にて、老いたるもあれば、又、さまで大きからぬもあれど、下枝は、皆よく揃ひて、海波に垂れたる景色、殊に面白し。切戸きりどといふ所に、智恩寺といふ寺あり。山門も、塔も、本堂も、建築、みな古雅にして、ゆかし。

かくて、それより、龍燈の松、涙が磯などいふ名所をば、横にながめつつ、夕ぐれのほどに、また、宮津に歸りぬ。(幸田露伴―露伴叢書)

三五、満珠干珠その一

神代の昔、火闌降尊、彦火火出見尊と申す兄弟の神を給ひき。兄の尊は、鉤をもて、魚を釣ることに巧にして、海幸彦と呼ばれ、弟の尊は、弓矢をもて、獸を獵ることを得意として、山幸彦と呼ばれ給ひ、海と山とに別れて、業をはげみ、一日も怠り給ふことなし。

或日、弟の尊は、兄の尊に向ひ給ひて、兄上よ。かく長き年月、同じことのみ繰り返すも退屈なり。一日、互に、幸を換へて、兄上は、山に入りて、獸を獵り、余は、海に出でて、魚を釣らんはいかに」と宣へば、兄の尊も、そは珍しくして、面白からん」と同意し給ひ、互に、得物を取り

つりざを
(釣竿)

換へて、兄は、弓矢を持ち、弟は、釣竿を携へて、山と海とへ出でゆき給ふ。

さて、弟の尊は、海に出でて、魚を釣り給ふに、弓矢取りては及ぶものなき御身も、馴れぬ業はせん方なく、終日漁れども、魚一つだに得給はず。はては、その鉤をさへ失ひ給ひければ、驚きて、搜り求めたれども、得給はず。悄然として、家に歸り給ひぬ。兄の尊も、一日獵りくらして、一頭の獲物もなく、うち腹立ちて、歸り來り給ひ、弟の尊の弓矢を返して、わが鉤を求め給ひぬ。弟の尊は、是非なく、鉤を失ひぬる由をいひ給へば、兄の

いさどほる
(憤)

尊は、烈火の如く憤り給ひて、鉤を出せと責め給ふ。弟の尊は、腰に佩きたる劔を碎きて、五百箇の鉤をつくりて、償とし給ひけれども、片意地なる兄の尊は、なほ、強ひて、もとの鉤を得んとて、益責めはたり給ふ。

弟の尊は、兄の尊に責められ給ひて、日毎に、海濱に出でて、愁へ歎きぬ給へるに、或日、鹽土の翁といふもの出で來りて、何故に、かくは泣き憂へ給ふぞと問ふ。しかじかの由物語り給へば、翁聞きて、さらば、我、御身の爲に、よく謀りまゐらせん。憂へ給ふなといひて、やがて、無目籠といふ、竹にて編みたる、小舟の如き籠を

もて來て、いざ、これに乗り給へ。我、この籠を押し流さば、稍暫して、必ず、よき途あるべし。その途を行き給はば、龍宮に著き給ふべし。そこにて、海の王に相談し給はば、必ず、もとの鈎を得給ふべし。とて、弟の尊を、その籠に載せて押し流せば、不思議や、籠は、自ら、海の中に沈みぬ。

三六、 滿珠干珠その二

弟の尊は、無目籠に乗りて、鹽土の翁の教へしままに沈み行けば、暫して、海の底なる汀に著き給ひぬ。向

る。づつ
(井筒)

を見給へば、瑠璃の瓦、瑪瑙の門、貝の敷石など、輝くばかり、美しき宮殿あり。門の前には、大いなる樹あり。その下には、きらやかなる井筒あり。これぞ、翁の教へし龍宮ならんとて、進みよりて、案内を請ひ給へども、應ずる者もなければ、樹に上りて、待ち居給へり。

時に、門内より、二人の姫出で來りて、井筒に立ち寄り、黄金の釣瓶もて、水を汲まんとして、ふと、水に映れる、尊の顔を見て、驚き仰ぎ見るとき、尊は、徐に、樹より下りて、驚き給ふな。我は、日本國より、しかじかの故ありて、來れるものなり。願はくは、ここの主人の君に會

はせ給へ」と宣ひつつ、頸上に懸けたる曲玉一箇を取りて、姫に渡し給ふ。姫達は、さては、日の本の天孫にて渡らせ給ふか。われらは海神の女なり。いぎ、此方へ」と、直に、尊を、宮中に請じ入れぬ。

さて、尊は、海神に對面して、くはしく、兄の尊の、失せたる鉤を乞ひ責むる狀を語り給へば、海神は、深く同情して、直に、部下なる、大小の魚類を、悉く呼び集めて、「もし、鉤を取りたるものなきか」と問ふに、多くの魚ども、皆、知らずと申す。その中に、一つの魚ありて、「この頃、口女、喉に、鯁ありて、物食はれず」とて、歎き居たるが、今

日の御召にも參らず。その鉤は、必ず、口女が取りたるならん」と申す。急ぎ、口女を召して、その喉を探れば、果して、鉤あり。取りて、洗ひ清めて、尊に獻りぬ。

目ざす鉤を得て、尊は、直に歸らんとし給ひつれど、海神父子、強ひて留むるままに、心ならずも、三年の年月を、龍宮に送り給へり。さて、いよいよ、別を告げて、歸らんとし給へば、龍宮の人人は、別を惜み、なかにも、二人の姫は、各、一つの珠を取り出して、「こは潮満珠、潮干珠とて、類なき寶珠なり。潮満珠を、額にあてて祈らば、何時にても、大海の潮を呼び、また、潮干珠もて祈らば、

ひたひ(額)

何時にても潮干る定なり。これを、餞のしるしにとて、尊に獻りぬ。尊は大いに悦び給ひ、この二つの珠を懷にして、宮殿を出て給へば、海神の命を受けたる、八尋の大鰐は、尊を背に乗せて、大海を走ること、電の如く、忽にして、日本の地に送りつけ奉れり。

かくて、尊は、直に、兄の尊を訪ひて、鉤を返し給ひぬ。兄の尊は、鉤のことを口實として、弟の尊を逐ひ失ひ、我ひとりにて、我儘に、世を渡らんと思ひ居給ひたれば、弟の尊の歸れるを見て、いたく惡み、遂には、これを殺さんとの心を起し給ひて、或日、多くの惡人どもを

語ひて、弟の尊を襲ひ給ふ。弟の尊は、徐に、潮満珠を、懷より取り出して、額にあて給へば、不思議や、大潮、忽ち満ち來りて、四邊は、一面の大海となり、兄の尊を始め、惡人どもは、盡く溺れ苦み、赦し給へ、赦し給へ」と泣き叫ぶ。弟の尊、乃ち、潮干珠をもて祈り給へば、潮は、忽ち退きて干たり。

をののく

この奇瑞を見て、兄の尊は、怖れをののき、かかる威徳ある弟を殺さんとしつることを、いたく後悔して、心を改め給ひたれば、弟の尊は、大いに喜び給ひ、それより、兄弟、心を合はせて、世を治むることに、専ら、力を

盡し給ひきといふ。

新定中等國語讀本卷一終

大正十年八月二十日 文部省檢定濟 中國語科 校用

大正十年十二月六日 大正十一年二月三日 大正十一年九月九日 大正十一年十一月十三日 校訂再版發行 校訂再版發行 校訂再版發行 校訂再版發行

不許複製

著者 相續者 補修者 印刷者

新定中等國語讀本

臨時定價	大正十四年度	定價	卷一、二各金四拾錢	卷三、四各金參拾九錢	卷五、六各金參拾壹錢	卷七、八各金七拾貳錢	卷九、十各金七拾錢	卷十一、十二各金五拾六錢

故落合直文 落合直幸 萩野由之 森林太郎 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社明治書院 取締役社長 三樹一平

發行所

東京市神田區錦町一丁目 振替貯金口座東京四九九一番

株式會社

明治書院

電話大手五八四五・六八六九番

住所安佐郡川内村字中調子

山陽中學校

第一學年

山本春三